

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.288

2017年5月

平成29年度入学式を挙げる



## 目次

●ニュース	
平成29年度入学式を挙	3
大学院博士課程の学生2名が日本学術振興会育志賞を受賞	12
名大 MIRAI GSC 海外研修を開催	12
名古屋大学オープンレクチャー2017を開催	13
モンゴル自然環境・観光省と覚書を締結	13
東山総合運動場人工芝フィールド改修工事完工式を挙	14
第56回経営協議会を開催	14
平成28年度退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	15
下駄の鼻緒奨学金授与式を挙	15
平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる	16
●知の未来へ	
どのような微小粒子が地球大気を加熱・冷却するのか？	17
中山 智喜（宇宙地球環境研究所講師）	
●知の先端	
植物の根へ酸素を供給する仕組み	18
中園 幹生（大学院生命農学研究科教授）	
●部局ニュース	
情報学部・大学院情報学研究科看板除幕式及び大学院情報学研究科附属価値創造研究センター看板上掲式を挙	20
大学院人文学研究科の看板除幕式を挙	21
在モンゴル名古屋大学日本法教育研究センター開設10周年記念式典を開催	21
第2回理学部装置開発室公開講座「3D工房」を開催	22
モンゴル政府主催地震防災ワークショップを共催	22
大学教育改革フォーラム in 東海2017を開催	23
ミクロの探検隊®を開催	23
セミナーハウス展示「写真展－博物館友の会写真サークル」を開催	24
第68回名古屋大学博物館コンサート（NUMCo）を開催	24
第129回防災アカデミーを開催	24
●新名誉教授のことば	25
●名大を表敬訪問された方々	27
●新たに締結した学術交流協定	27
●構成員を対象とした研修	27
●新任役員等の紹介	28
●新任部局長等の紹介	29
●資料	32
●INFORMATION	
第58回名大祭を開催	35
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成29年3月16日～4月15日	36
●イベントカレンダー	38
●ちょっと名大史	
ちょっと「ちょっと名大史」一連載15周年一	40

# 平成29年度入学式を挙





平成29年度名古屋大学入学式が、4月5日(水)、豊田講堂において大学院は午前9時30分から、学部については、文、法、経済、理、医学部を対象に午前11時から、教育、情報、工、農学部を対象に午後1時からそれぞれ挙行されました。

今年度の入学生は、大学院2,239名(修士課程及び博士課程前期課程1,688名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)29名、医学博士課程及び博士課程後期課程522名)及び学部2,181名の4,420名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、松尾総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、祝辞が述べられました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

続いて、各研究科長等の紹介があった後、大学院環境学研究科博士課程後期課程入学生のハヤシ・ブルーノ・ナオマサさん、文学部入学生の緒方隼斗さん及び農学部入学生の日野雄太さんが、入学生総代として、入学にあたり本学の学生としての本分



を全うすることを宣誓しました。

また、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎トヨタ自動車株式会社名誉会長から祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

引き続き、名古屋大学混声合唱団が、歓迎の歌を合唱し、名古屋大学交響楽団による「交響曲第1番第4楽章」(ブラームス作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典の後、学部入学生を対象として、学生による「入学祭典」と称したサークル紹介が行われました。様々なサークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛

り上がりました。

終了後は、豊田講堂の前庭に詰めかけた大勢の学生から、部活やサークルの勧誘を受けたり、家族などと晴れやかな表情で記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、経済学部カンファレンスホール及びIB電子情報館大講義室、また、本学ホームページ上でライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/info/29.html>)で視聴することができます。

# 平成29年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

名古屋大学大学院への進学、おめでとうございます。皆さんは、これまで切磋琢磨して培ってきた力を、大学院というより高度な場で、一層磨き、大きく成長するために、名古屋大学大学院に進学されました。本日ここに、2,239名の皆さんを、新しい仲間として名古屋大学大学院に迎えることができたことを、総長として、心から嬉しく思います。皆さんは、これからの日本および世界をリードしていく人材として、大きな期待を背負っています。大学院はそのようなリーダー人材を育成するチャレンジングな場があります。従って、厳しさもより大きく、立ちはだかる壁もより高いと思います。そのような場に、勇気をもって一歩足を進めた皆さんの決断をまず、賞賛したいと思います。名古屋大学大学院での生活が、皆さんにとって実り多いものとなるよう、総長として、また、先輩として、皆さんに歓迎と激励の言葉を贈りたいと思います。

名古屋大学では今、大学院の充実を何よりも重要であると考えています。その理由をお話したいと思います。現代の社会は急速に変化しています。産業構造を見ても、蒸気機関の発明から、大量生産の時代を経て、20世紀から現在にかけては、エレクトロニクス、電子機器、パソコン、スマホなどの普及により、情報化社会の時代になっています。さらにその先には、あらゆるデータがインターネットにつながり、人工知能が活躍し、社会全体がスマート化されて、産業だけでなく、人の生き方も一変する時代になると予想されています。本格的な知識基盤社会、あるいはもっと具体的に、あらゆる情報がデジタル化されて集積され、ものづくりも含め、そこから新しい価値が生まれる時代、即ちデジタル社会が到来しつつあります。この時代に必要とされるのは、高度知識基盤社会を支える人材であり、日本や世界にイノベーションをもたらす人材です。このような人材が、働く場所や分野を問わず、思う存分活躍する社会を実現しなければ、日本は世界の潮流から大きく取り残されるでしょう。

このような人材に加え、未来社会のビジョンを創りデザインする人材が必要です。それは、高度な専門知識や技術に加えて、社会貢献の高い志と幅広い視野、多様性を理解して受け入れる広い心、そして物事を動かしていくリー



ダーシップなどの資質を持ち、人類的な課題と向き合って果敢に挑む人材、すなわち「勇気ある知識人」である、と私は考えています。名古屋大学では、キャンパスの多様化を積極的に進めてきました。その柱は世界やアジアと結ぶ国際化と女性の活躍促進です。キャンパスの学生の8人に一人は外国からの留学生であり、また、多くの名古屋大学の学生が留学を経験し、研究者同士の交流も盛んであり、女性の活躍促進のための様々な施策や、社会や産業界との連携に積極的に取り組んできました。名古屋大学は、日本と世界の未来ビジョンを創り、積極的に提言する使命を社会から負託されています。未来社会のビジョン創りには、人文系や社会科学系の研究者の果たす役割も大変大きいものがあります。総合大学である名古屋大学では、様々な専門分野の人たちが議論をし、協働して学問を深めることにより、次世代に向けた新しい価値の創造に貢献したいと考えています。

さて、私は最近、協定締結のために米国の中西部にあるオハイオ州立大学を訪れました。オハイオ州は、かつては製造業が盛んな州でしたが、時代の変遷とともに鉄鋼業や製造業などの凋落により、多くの失業者を生んでいる、いわゆるラストベルト（錆びついた地域）の中にある州です。人口は全米で7番目に多く、昨年のも米国大統領選挙でも、トランプ政権実現の大きな転換点になった州の一つです。オハイオ州立大学があるオハイオ州の州都コロンバスという町は、このラストベルトの真ん中にありますが、今、確実に町が拡大し、失業率も全米平均よりかなり下回っています。コロンバスには、自動車産業はじめ世界中から多くの企業が進出していますが、オハイオ州立大学があることにより教育水準が高いことから、金融、保険、ロジスティクスなどの新しい産業も起こっています。オハイオ州立大学では、教職員すなわち被雇用者数はコロンバス市役所に次いで2番目に多く、また、数多くの留学生を全世界から



集め、多くの企業と共同研究を行っています。さらに、様々な領域で情報イノベーション人材を育成するために、全米でも最大規模の Translational Data Analytics を立ち上げ、大学を挙げて推進しています。また、名古屋大学の現地法人事務所があるノースカロライナ州でも、大学と地域が一体となって次世代産業の育成に取り組んでいます。ここでは、工学が得意なノースカロライナ州立大学と医学が得意なノースカロライナ大学チャペルヒル校が共同で医工連携の学部を創設し、社会のニーズに対応するため、現在、新しい大学院の創設に取り組んでいます。概して、有力な大学のある地域は、高度な産業の集積が進み、また新しい産業が起りやすく、次世代に向けた力強い歩みを感じられます。これらの例から言えることは、有力な大学の存在は地域の発展や新しい産業創出の原動力になっているということです。もちろんそれらを支えている大きな力が、大学院における研究や人材育成であることは言うまでもありません。

日本は20世紀の後半から現在に至るまで、ものづくりによる産業の集積において、世界で最も成功した国であり、特に名古屋大学が位置する東海地区あるいは中京地区は、長年にわたりその中心となってきました。しかしながら、米国の製造業の盛衰を見ても明らかなように、繁栄を維持するには未来に向けて挑戦し続けることが重要です。日本をラストベルトにはしてはいけません。私たちは未来に向けて新しい価値を創造しなくてはなりません。名古屋大学には21世紀の新しい時代を引っ張っていくリーダーを育てる責任があります。同時にまた、皆さん一人ひとりには、未来を切り拓くリーダーたらんとする心意気を持ち続けて頂きたいと思います。

名古屋大学の自由闊達な気風は、学術研究の面で卓越した成果をもたらしました。21世紀に入ってからノーベル賞

を受賞した日本人16名のうち6名が名古屋大学関連の研究者であり、世界的に見ても特筆すべき事実です。また、このような素晴らしい先達に続けとばかり、皆さんの先輩にあたる若手研究者が素晴らしい研究成果を挙げています。一方で社会に飛び出した卒業生は、産業界を中心に素晴らしい活躍をされています。その中には、本日も来賓としてお招きしておりますトヨタ自動車株式会社名誉会長で名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎様をはじめ、現代日本の経済と社会をリードしておられる方を、綺羅星のごとく輩出しています。これらの先達は、皆さんの良い目標、あるいはロールモデルになるでしょう。世界は今、多様な価値観や異文化が交錯し、21世紀に入ってから、これまでの常識では想像できなかった世界を揺るがす大事件が次々に起こっています。また、我が国では、世界でも類をみない超高齢社会がすでに到来しており、国の将来に対する不安が広がっています。国の内外で、解決すべき課題は山積しています。皆さんには名古屋大学大学院での研究生活を通じて、「勇気ある知識人」に成長していただきたいと切に願っています。

名古屋大学第三代総長の勝沼精蔵先生はこのように言っています。「行動だよ。何もしないで、ある日突然潜在能力は、現れはしない」。また、2014年のノーベル賞受賞者で名古屋大学特別教授の赤崎 勇先生は、青色LEDの発明についてシンプルに、「我ひとり、荒野に行く」、という心境であったと書かれています。皆さんが名古屋大学大学院で過ごすこれからの時間は、楽しみよりも苦しいことのほうが多いかも知れませんが、まさに自分を鍛えて、大きく成長する絶好のチャンスです。是非とも、勇気と希望を持って前に進んでください。名古屋大学での大学院生活が皆さんにとって、実り多く充実したものになるよう、強い願いを込めて、私からの祝辞といたします。本日は大学院進学、本当におめでとうございます。

# 平成29年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一



新入生の皆さん、名古屋大学への入学、おめでとうございます。皆さんは、大学受験という厳しい試練を乗り越えて、名古屋大学の一員となりました。本日ここに、新学部生2,181名を、新しい仲間として名古屋大学に迎えることができたことを、総長として、心から嬉しく思います。皆さんは今日から、未来への希望に燃えて、この名古屋大学での生活を始めます。大学での生活は皆さんが過ごしてきた高校までの生活の単純な延長ではありません。名古屋大学は、皆さんが勉学や様々な活動を通して、多くの人に出会い、成長し、最終的には名古屋大学の教育目標である「勇気ある知識人」に脱皮するために、チャンスをつかむ場であり、チャレンジする場であります。名古屋大学でのキャンパスライフが、皆さんにとって実り多いものとなるよう、総長として、また、先輩として、皆さんに歓迎と激励の言葉を贈りたいと思います。

「大学生生活はこれまでの生活とは大きく異なり、皆さんが飛躍的に成長を遂げる節目である」ということについて、話したいと思います。皆さんは、これまでの学校生活の中で熱心に勉学に励み、すでに多くの知識を身に付けてきたことと思います。現代はまた、インターネットが発達し、その気になればどんな情報も瞬時にして手に入る時代です。これまでとは比べ物にならないくらいの情報があふれている時代であるといえます。しかし、これらの情報はあくまで情報であり、実態を伴った現実世界、リアル・ワールドではありません。情報それ自体は、自分自身とは離れた仮想の存在であるといえます。私が皆さんに名古屋大学で学んで欲しいと思うことは、「自分の目で見、耳で聞き、身体で体験し、多様な人達と議論をしながら、社会の様々な課題を自分自身の頭で考えて理解し、課題解決の道筋を明確にしようと努力すること、そして、また、そのような習慣を身に着けること」です。

名古屋大学のキャンパスでは、皆さん一人ひとりが自律的に成長していくための様々な環境が整っています。施設や設備だけでなく、名古屋大学は多様性に富むキャンパスづくりを目指しています。皆さんがこれからの人生を歩んでいくうえで大切な、様々な人との出会いの場として、多様性、ダイバーシティを特に重視しています。キャンパスの多様化の柱は、ずばり、世界やアジアと結ぶ国際化と女性の活躍促進です。名古屋大学は早い時期から、欧米の大学はもとより、アジア諸国との交流に力を注いでおり、留学生の受け入れを積極的に行ってきました。キャンパスの学生の8人に一人は外国からの留学生です。また、女性の活躍促進のための様々な取り組みや、社会や産業界との連携も着実に進めています。名古屋大学から海外に留学する学生も年々増加し、昨年度は短期長期あわせて1,000名を超える学生が海外で学ぶ機会を得ています。名古屋大学の学生は、ややもすればおとなしい、と言われるがちですが、近年の学生の活動性や積極性は高まっており、キャンパスの雰囲気明らかに変わってきています。「もう名大生をおとなしいとは言わせない」、というのが私の考えです。

さてここで、名古屋大学の歴史と未来を語ってみたいと思います。名古屋大学の源流は、1871年（明治4年）に創設された仮医学校・仮病院にさかのぼります。この年を名古屋大学の創基としています。長い歴史の中で、名古屋大学は幾多の素晴らしい指導者を輩出しました。「名古屋大学歴代総長略伝」によりますと、1881年から83年にかけて名古屋大学の前身である愛知医学校の校長を務めたのが後藤新平です。後藤新平は幕末の鳥羽伏見の戦いから函館戦争に至る、いわゆる戊辰戦争で、明治新政府と敵対した水沢藩士であったため、極貧で苦学を強いられましたが、医師となり、弱冠24歳にして愛知医学校校長兼愛知病院長を務めました。後藤新平は、当時、全国的にみれば立ち遅れていた愛知病院の改革を断行しました。恩師である外国人



医師のローレツの帰国に際し、後任を超高額サラリーの外国人医師ではなく、当時では数少ない貴重な日本人医師の雇用に切り替え、カリキュラムを充実させ、人材育成に大いに貢献しました。これにより、愛知医学校は全国的にも有名になり、1883年には全国でも数少ない甲種医学校、即ちトップレベルの大学に選定され、今日の名古屋大学の発展につながっています。後藤新平の残した言葉の中に、「金銭を残して死ぬ者は下、仕事を残して死ぬ者は中、人を残して死ぬ者は上である」というのがあります。強烈に人材育成の重要さを思っていたことが良くわかります。この考え方は今も名古屋大学で受け継がれていると思います。後藤新平はまた医師として、果敢な行動に出ることもありました。すなわち、1882年に岐阜で自由党党首の板垣退助が暴漢に襲われる事件がありました。この時、政府ににらまれるのを恐れて誰もが尻込みする中で、愛知病院の病院長であった後藤新平が駆けつけて治療をし、一命をとりとめた話はあまりにも有名です。後藤新平はその後、伝染病対策などの衛生行政に転じ、さらに国の要職を歴任するのですが、とにかく計画立案が好きで、大きな構想を打ち上げる人物として知られていたようです。構想するだけでなく、自ら先頭に立って実現に取り組んでいます。彼はこんな言葉も残しています。「妄想するよりは活動せよ。疑惑するよりは活動せよ」。この言葉は今日の我々にも、通じるのではないかと思います。後藤新平は、知略と行動する勇気を兼ね備えたリーダーであったといえます。「リーダーとしての使命を果たすために信念を貫く」という高い志、この気風は今も名古屋大学に受け継がれていると思います。

さて、名古屋大学は1939年に最後の帝国大学になりましたが、間もなく終戦を迎え、極めて厳しい状況におかれました。しかし多くの先輩たちが、地元政財界の強力な支援も受けて、名古屋大学を、地方大学から国の拠点大学へ、

そして世界有数の大学へと飛躍させるべく献身的に活動しました。その結果、今日では、名古屋大学は日本を代表する大学の一つになっています。名古屋大学は特に21世紀に入り、大きく花開きました。学術研究の面では、21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した日本人16名のうち6名が名古屋大学関連の研究者であり、これは世界的に見ても特筆すべき事実です。その一方で、社会に飛び出した卒業生は、産業界を中心に素晴らしい活躍をされています。その中には、本日も来賓としてお招きしておりますトヨタ自動車株式会社名誉会長で名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎様はじめ、現代日本の経済と社会をけん引しておられるリーダーを、綺羅星のごとく輩出しています。これらの先達は、皆さんにとって良い目標であり、ロールモデルとなるでしょう。

世界は今、多様な価値観や異文化が交錯し、21世紀に入ってから、これまでの常識では想像できなかった、世界を揺るがす大事件が次々に起こっています。また、我が国では、世界でも類をみない超高齢社会がすでに到来しており、国の将来に対する不安が広がっています。国の内外で、解決すべき課題は山積しています。皆さんには名古屋大学でのキャンパス生活を通じて、それぞれの領域の勉学に励み専門性を高めるとともに、高い志と幅広い視野を持ち、多様性を理解して受け入れる広い心、そして物事を動かしていくリーダーシップを身に着け、人類的な課題と向き合い、果敢に挑む人材、すなわち「勇気ある知識人」に成長することを、切に願っています。皆さんが名古屋大学で過ごすこれからの時間は、まさに自分を鍛えて大きくする絶好のチャンスです。是非とも、勇気と希望を持って前に進んでください。名古屋大学での学生生活が皆さんにとって、実り多く充実したものになるよう、強い願いを込めて、私からの祝辞といたします。本日は本当におめでとうございます。

## 来賓祝辞（平成29年度大学院入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長  
トヨタ自動車株式会社名誉会長



本日は、名古屋大学大学院の入学式にお招きいただきまして、誠に有難うございます。名古屋大学全学同窓会を代表しまして、本日ご入学されました皆様に、心よりお祝い申し上げます。

さて、皆様にご入学されました名古屋大学は、昭和14年、1939年に創立以来、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を学術憲章に掲げております。この学風からは、6名のノーベル賞受賞者をはじめとして、科学、医学、人文、社会科学などの幅広い分野で、世界をリードする多くの研究者の方々を輩出しておられます。また、中部地区の基幹総合大学として、ものづくり中部、ものづくり日本を担う人材をはじめ、幾多の分野で幅広く有為な人材を輩出してまいりましたことは、皆様もすでにご承知のとおりでございます。

しかし、世界ではグローバル化とイノベーションが急速に進展し、日本は、産業・企業だけでなく、大学もグローバルな競争の真っ只中にあるわけでございます。

そして現在、松尾総長のリーダーシップの下、NU MIRAI 2020「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」という松尾イニシアティブに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進などをはじめとする大学の国際化を強力に進めておられます。

このように、名古屋大学は、皆様の期待に十分応えてくれる大学及び大学院であると確信しております。

皆様には、決して現状に安住することなく、名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして十分に活かし、「世界の中の日本」という視点に立って、常に視野を広く持ち、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図っていただきたいと思います。

特に、将来の日本を担うリーダーとしての役割が期待されております皆様には、学生生活を通して、高い志や、他に謙虚に学ぶ姿勢、そして思いやりの心といったもの大切さを、しっかりと掴み取っていただきたいと思います。







さて、名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し、設立後15年目を迎えております。国内には、関東支部、関西支部及び浜松を中心とした遠州会の三つの支部がございます。また、海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、マレーシアの合計15の支部を設立しております。マニラで開催されましたフィリピン支部設立には私も参加してまいりました。名古屋大学への留学経験をお持ちの同窓生の皆様は、本国で大変活躍されており、名古屋大学への思いが深く、支部設立を大変喜んでおられました。また、昨年は、海外の卒業生の中から大臣を輩出するという喜ばしい出来事もありました。

毎年10月に開催されるホームカミングデーでは、設立直後の海外支部の代表者をお招きして、歓迎交流会を総長にご参加いただき開催しています。今年も10月20日に歓迎交流会を開催の予定です。

今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の

拠点として、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところでございます。

名古屋大学全学同窓会の準会員でございます皆様にも、今後留学などで、これらの支部と積極的に交流していただき、名古屋大学の国際的なネットワークを是非広げていただきたいと期待しております。

私ども全学同窓会も、名古屋大学が、研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより、世界屈指の国際競争力を持った大学となるように皆様と一緒に活動してまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、皆様のこれからの学生生活が楽しく、充実したものになりますことを心から祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。どうぞ頑張ってください。



## 来賓祝辞（平成29年度学部入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長  
トヨタ自動車株式会社名誉会長



本日は、名古屋大学の入学式にお招きいただきまして、誠に有難うございます。名古屋大学全学同窓会を代表しまして、本日も入学されました皆様に、心よりお祝い申し上げます。

さて、今、皆様は、大変フレッシュな気持ちで、この場に集まっておられると思います。私も、先ほどから、緊張の中にも、若さと希望にあふれた皆様のお顔を拝見いたしまして、非常に爽やかな気持ちであります。

これから新たに大学生活に入られる皆様は、大きな夢や期待を胸に、新しいことにどんどんチャレンジしていこうと思っておられることでしょう。

名古屋大学には、総合大学としまして、自然科学から社会科学、人文科学まで、いずれも世界トップレベルの教授陣を擁し、充実した魅力ある学部・研究科・講座がそろっております。さらに、創立以来、独創性豊かで、自由闊達、清新な学風は、良き伝統として今日まで脈々と受け継がれてきております。名古屋大学関係者から6名のノーベル賞受賞者が輩出されていることからこのことが分かります。

ます。

そして現在、松尾総長のリーダーシップの下、NU MIRAI 2020「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」という松尾イニシアティブに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進などをはじめとする大学の国際化を強力に進めておられます。

このように、名古屋大学は、皆様の期待に十分応えてくれる大学であると確信しております。

皆様も、決して現状に安住することなく、名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして十分に活かし、「世界の中の日本」という視点に立ちまして、常に視野を広く持ち、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図っていただきたいと思います。

特に、将来の日本を担うリーダーとしての役割が期待されております皆様には、学生生活を通して、高い志や、他に謙虚に学ぶ姿勢、そして思いやりの心といったものの大





切さを、しっかりと掴み取っていただきたいと思っております。

さて、名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し、設立後15年目を迎えております。国内には、関東支部、関西支部及び浜松を中心とした遠州会の三つの支部がございます。また、海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々が中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、マレーシアの合計15の支部を設立しております。マニラで開催されましたフィリピン支部設立には私も参加してまいりました。名古屋大学への留学経験をお持ちの同窓生の皆様は、大変活躍されており、昨年は、海外の卒業生の中から大臣を輩出するという喜ばしい出来事もありました。今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点といたしまして、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところでございます。

皆様は、今日から名古屋大学全学同窓会の準会員となりますが、皆様にも、今後留学などで、これらの支部と積極的に交流していただき、名古屋大学の国際的なネットワークを是非広げていただきたいと思っております。

私ども全学同窓会も、名古屋大学が、研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより、世界屈指の国際競争力を持った大学となるように皆様と一緒に活動してまいりたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

最後に、皆様のこれからの学生生活が楽しく、充実したものになりますことを心から祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございます。どうぞ、頑張ってください。



## 大学院博士課程の学生2名が日本学術振興会育志賞を受賞

大学院理学研究科の伊藤亜実さんと大学院創薬科学研究科の志甫谷涉さんが、日本学術振興会育志賞を受賞しました。同賞は、将来我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することで、若手研究者の養成を図ることを目的としており、平成22年度に創設されました。第7回となる今年度は、全国の



総長への報告後の記念撮影（左が志甫谷さん、右が伊藤さん）

大学・学会から推薦された130名の中から、17名が受賞者として選ばれました。

なお、授賞式は3月8日(水)に日本学士院において挙行されました。受賞者とその研究課題は以下のとおりです。

伊藤 亜実 大学院理学研究科  
・研究課題：紡錘体の極形成機構の解明

志甫谷 涉 大学院創薬科学研究科  
・研究課題：治療薬および内在性リガンドが結合した、エンドセリン受容体の X 線結晶構造解析

## 名大 MIRAI GSC 海外研修を開催

名大 MIRAI GSC（グローバルサイエンスキャンパス）の海外研修が、3月9日(木)から3月16日(木)までの間、ドイツ・フライブルク大学において開催されました。この海外研修には、名大 MIRAI GSC 第3ステージの受講生である東海4県の高校2年生21名が参加しました。受講生らは1日目に大学の歴史や教育システムを紹介する歓迎セミ



フライブルク大学（化学棟）訪問時の様子

ナーに参加した後、大学博物館のツアーに参加しました。また、同日は名大 MIRAI GSC 運営委員である國枝理事へフライブルク大学から記念の大学メダルが授与される式典にも参加しました。研修2日目には、物理、化学、生命／医学の各分野を専門とする教員の前で英語による11のテーマの研究発表とディスカッションを行いました。受講生からは「フライブルク大学の先生方が本当に丁寧に発表を聴いてくれたので、半年間練習してきた成果を発揮することができた。その一方で、もっと改善できる点があったとわかった。また、英語の大切さが身にしみてわかった」といった感想が聞かれました。

研究発表後は本学と共同研究を行っている有機化学の研究室を訪問し、研究についての特別講義を受講した後、研究室を見学しました。6泊8日の日程の中では、フライブルクにあるUWCカレッジ（高校）を訪問してディスカッションの授業に参加した他、ハイデルベルク大学に在籍している本学卒業生から、研究内容やドイツと日本の大学についての話を聴く体験や、チューリッヒ他の科学施設を訪問し実験体験を行いました。

## 名古屋大学オープンレクチャー2017を開催

名古屋大学オープンレクチャー2017が、3月20日（月・祝）、本学において開催され、少人数の講義スタイルで本学の先端研究を紹介しました。

当日は暖かい日差しの中、246名の参加者が会場を訪れました。参加者は理学南館坂田・平田ホールで大学のトピックスを聞いた後、各会場に別れ講義に参加しました。



講義中に実演を行っている伊藤講師

人類の生き残り戦略の講義では、食料資源の変化と技術進化を石器の作成実演などを行いながら紹介しました。植物の環境適応を学ぶ講義では気孔を観察し、ミクロの世界を紹介する講義では原子が実際に揺れる様子を電子顕微鏡で観察しました。参加者からは「地球環境と台風の関わりが良くわかった」、「素粒子をもっと知りたいと思った」、「グラフェンについて初めて知ったがその面白い性質や将来性がわかった」などの感想がありました。参加者アンケートでは94%の方が満足、やや満足と回答しました。

今回開講された講義は「素粒子を調べる最強加速器実験のはなし」（居波賢二理学研究科准教授）、「資源開発と技術革新の昔ばなし：人類史から学ぶ生存戦略」（門脇誠二博物館講師）、「植物の巧みな生き方のはなし」（木下俊則トランスフォーマティブ生命分子研究所教授）、「台風のはなし」（坪木和久宇宙地球環境研究所教授）、「物質からのミクロな記号を読み解くはなし」（武藤俊介未来材料・システム研究所教授）、「世界で一番うすい物質のはなし」（楠美智子未来材料・システム研究所教授、北浦 良理学研究科准教授、伊藤英人教養教育院講師）の6講義でした。

## モンゴル自然環境・観光省と覚書を締結

本学とモンゴル自然環境・観光省は、3月20日（木）、モンゴル自然環境・観光省において、研究及び人材交流に関する覚書を締結しました。その趣旨は、「自然環境・自然災害研究、環境政策等に関する活動を協力して行う」ものであり、環境学研究科・減災連携研究センター・アジアサテライトキャンパス学院が提案母体となりました。本覚書



覚書締結式の様子

の趣旨に基づき、アジアサテライトキャンパスへ同省職員が推薦され、また、本学がモンゴル国立大学内に共同設置しているレジリエンス共同研究センターとの共同研究も昨年からのスタートしています。

締結式には、モンゴル側からはツェグミド・ツェンゲル事務次官、ハンドジャヴ・バトジャルガル行政管理部長、バヤルト・ユールト気候変動国際部長らが、本学からは市橋理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長、伊藤勝基参与、鈴木康弘減災連携研究センター教授、辻 篤子国際機構特任教授らが参加し、本学モンゴル事務所職員が同省との調整を担いました。

## 東山総合運動場人工芝フィールド改修工事完工式を挙行

東山総合運動場人工芝フィールド改修工事完工式が、3月28日(火)に挙行されました。当日は晴天の下、松尾総長、理事をはじめとした役職員、体育会関係クラブ及びその他多数の関係者が出席しました。

本学グラウンドには平成17年に初めて人工芝が導入され、国立大学では筑波大学、東京大学に次ぐ3番目の導入



始球式（総長からラグビー部へ）

となりました。その後、正課・正課外の両面で大いに活用されてきましたが、経年及び過密使用により芝の消耗・劣化が顕著となり、部分補修では安全性の担保が困難となってきたことから、改修工事を実施することとなりました。

工事は1月末から3月上旬にかけて実施され、張替方法はオーバーレイ工法を採用することにより、既設人工芝の産廃縮減、工事期間短縮及び工事費低減を図りつつ、人工芝はグレードの高いものを導入しました。

完工式では、総長、國枝理事、体育会クラブを代表してラグビー部主将からあいさつがあった後、始球式が行われました。はじめに、ラグビー部が総長から、次にアメリカンフットボール部が國枝理事から、最後に男子ラクロス部が秋間 広総合保健体育科学センター教授からボールパスを受け、各々パフォーマンスを展開しました。途中、参加者からは感嘆の声が上がるなど、真新しい芝で駆ける学生の澁刺とした姿に、清々しい完工式となりました。

今回のリニューアルを経て、今後、より一層多くの学生がスポーツに親しみ、心身を鍛える場として活用されることが期待されます。

## 第56回経営協議会を開催

第56回経営協議会が、3月29日(水)、鶴舞地区の鶴友会館において開催されました。

会議では、松尾総長からあいさつの後、指定国立大学法人制度、執行部の職務分担等、平成29年度学内予算配分(案)、平成29事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画等、平成30年度概算要求(施設整備費)、人事関係



会議の様子

規程等の改正、第3期中期目標期間における平成29事業年度の業務運営等に関する計画、大学院生命農学研究科の改編、大学院国際開発研究科の改編及び特別短期研修学生制度の新設について総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、次期経営協議会委員、平成29年度施設整備実施予定事業(当初予算)、第2期中期目標期間の教育研究評価結果、大学院医学系研究科とロンド大学との国際連携総合医学専攻の設置、第7回(平成28年度)日本学術振興会育志賞、平成29年度入学者選抜実施状況及び公的研究費等の不適切な会計処理に関する調査結果について報告が行われました。

また、外部委員の方々からは、名古屋大学基金について意見交換がなされ、貴重なご意見が寄せられました。

## 平成28年度退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催

平成28年度名古屋大学退職者表彰式が、3月30日(木)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。表彰式は、平成29年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、当日は、被表彰者30名のうち24名の職員が出席し、松尾総長から被表彰者一人ひとりに表彰状が手渡されました。続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる



表彰状授与の様子

本学への尽力に対する感謝の言葉がありました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記の被表彰者のほか、関係部局の職員が出席しました。総長のあいさつの後、退職職員を代表して坪井直志研究所総務課長から謝辞がありました。懇談会では、退職職員が出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

## 下駄の鼻緒奨学金授与式を挙行

名古屋大学下駄の鼻緒奨学金授与式が、4月14日(金)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。

下駄の鼻緒奨学金は、名古屋大学学術憲章の基本理念及び寄附者の意向に基づき、本学の学部又は研究科に在学する人物で、成績が優秀でありながら経済的な理由により修学が困難な学生に対して、その学修・研究等の活動を奨励



下駄の鼻緒奨学金授与式

するために平成22年度に設立されたものです。

受賞者は奨学生4名(日本人学生2名、外国人留学生2名)で、授与式では奨学生採用通知書が授与されました。

奨学金選考委員長の木俣副総長から、「学生時代に下駄の鼻緒を切らし困っていた本奨学金の寄附者に、下駄の鼻緒を譲り渡した通りがかりの女性がかけた、『お礼は自分ではなく次に困っている人に返してください』との言葉の通り、寄附者の理念を引き継ぎ、社会に還元していく精神、奉仕の精神、互いに助け合う精神を忘れずに、学業や研究に一層励んでいただきたい」と祝辞があり、受賞者は改めて奨学生としての自覚を深めました。

授与式終了後に行われた木俣副総長及び奨学金選考委員会委員と奨学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中で、勉学内容や研究内容、進路等について活発な意見交換が行われ有意義な会となりました。

# 平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる

平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定され、本学から、科学技術賞で5件、若手科学者賞で10件が選出されました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我

受賞者は以下のとおりです。

## 科学技術賞

「SPRING-8/J-PARC/京の連携と先進タイヤ開発」

増渕 雄一 大学院工学研究科教授

「酸塩基複合化学を基盤とする高次機能触媒の創製研究」

石原 一彰 大学院工学研究科教授

「炭化物表面分解による新規ナノカーボン構造の創製と物性研究」

楠 美智子 未来材料・システム研究所教授

## 若手科学者賞

「イオン対の特性を活かした革新的分子触媒の開発に関する研究」

大松 亨介 トランスフォーマティブ生命分子研究所  
特任准教授

「視覚再生を目指した幹細胞制御と神経回路解析の研究」

小坂田文隆 大学院創薬科学研究科准教授

「非環状骨格を利用した機能性人工核酸開発に関する研究」

樫田 啓 大学院工学研究科准教授

「細胞間／器官間情報伝達を担う植物ペプチドホルモンの研究」

田畑 亮 PhD 登龍門推進室特任助教

「植物の概日リズムに関する転写制御ネットワークの研究」

中道 範人 トランスフォーマティブ生命分子研究所  
特任准教授

「低電力かつ低電圧な集積回路の設計と医療応用に関する研究」

新津 葵一 大学院工学研究科講師

が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としており、「科学技術賞（開発部門・研究部門・科学技術振興部門・技術部門・理解増進部門）」・「若手科学者賞」・「創意工夫功労者賞」・「創意工夫育成成功労学校賞」の各賞が設置されています。

授賞式は4月19日(水)に文部科学省で執り行われました。

「機械加工の高度化に関する研究」

社本 英二 大学院工学研究科教授

「関東大震災の研究を通じた地震災害の科学的理解増進」

武村 雅之 減災連携研究センター寄附研究部門教授

「りん光分子を用いた先進熱流体計測法の開発と高精度化の研究」

松田 佑 未来材料・システム研究所准教授

「宇宙線生成核種を用いた過去の単年宇宙線イベントの研究」

三宅 美沙 宇宙地球環境研究所准教授

「肺腺がんのリネジ特異的生存シグナル伝達機構の解明の研究」

山口 知也 熊本大学大学院先導機構大学院生命科学  
研究部准教授（卓越研究員）

（推薦時：大学院医学系研究科特任講師 \*本学からの推薦）

「中枢神経系における感覚情報処理機構の研究」

山下 貴之 環境医学研究所准教授



どのような微小粒子が地球大気を加熱・冷却するのか？

宇宙地球環境研究所講師  
中山 智喜

エアロゾルについては、光学特性がこれまでよくわかっていません。

そこで私たちは室内実験や実際の大気観測を通じて、様々なエアロゾルの光学特性を詳しく調べています。従来の研究手法では、大気中の粒子をろ紙に集めて分析するなど、実際の大気中の様子とは異なる状態で調べていました。私たちは、新しいレーザー分光法を用いて、粒子が浮遊した状態で、その光学特性をリアルタイムに測定しています。従来、気体の有機化合物の酸化反応により生成する二次有機エアロゾルは光吸収性を持たないとされてきました。私たちの研究で、人為起源のトルエンが大気汚染物質である窒素酸化物の存在下で酸化されるときに生成する粒子や、植物起源のイソプレンが二酸化硫黄の存在下で酸化されるときに生成する粒子は、紫外や短波長可視に光吸収性を持つことがわかりました。また、都市や森林、アジア大陸から日本に輸送された大気など様々なところにあるエアロゾルについて現場で調べています。これらの研究により、大気エアロゾルの光学特性の決定要因の理解とともに、エアロゾルが気候や環境変動に及ぼす影響の解明を目指しています。

近年のアジアの都市などでのPM2.5（直径2.5 $\mu\text{m}$ 以下の微小粒子状物質）の高濃度の報道などでわかるように、大気中には液体や固体の微小な粒子（エアロゾル粒子）が浮遊しています。エアロゾル粒子は、人間の健康に悪影響を及ぼすのに加え、太陽光を散乱または吸収したり、雲粒の生成に関与したりすることで、気候や大気環境に大きな影響を及ぼしています。大気エアロゾルには、海面からの海塩粒子や地表面からの土壌粒子、燃焼からのススや有機物粒子、菌類の孢子など、大気中に粒子として直接放出されるものがあります。さらに、石炭燃焼や火山から放出される気体の二酸化硫黄、植物から放出されるイソプレンやテルペン類、自動車排気などに含まれるトルエンといった気体が、大気中で酸化され、低蒸気圧の物質に変化することで粒子化するもの（二次生成粒子）があります。

エアロゾルの気候・環境影響は、粒子の光学特性によって大きく異なります。例えば、二酸化硫黄から生成する硫酸や硫酸塩エアロゾルは太陽光を吸収せずに宇宙空間へ散乱することで大気を冷却します。一方、黒色のスス粒子は太陽光を効率よく吸収し大気を加熱します。しかし、有機物の



図1 エアロゾルの放出・生成過程と放射収支への影響（直接効果）の概念図。

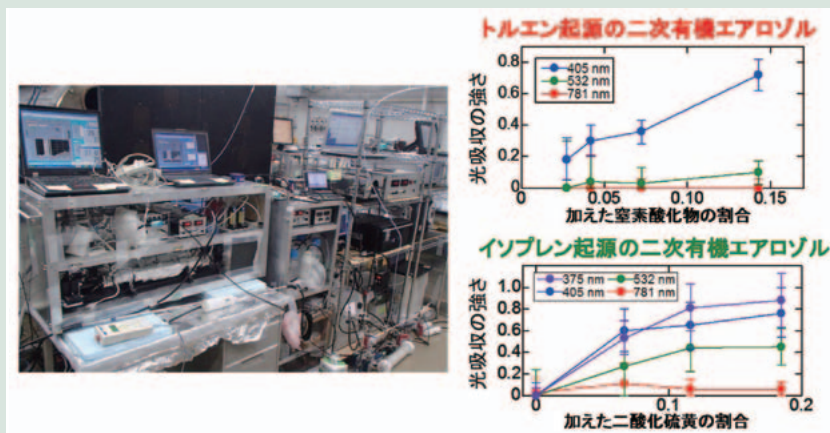


図2 (左) エアロゾルの光学特性を調べる装置の写真、(右) 実験室チャンバーでトルエンおよびイソプレンの光酸化反応で生成したエアロゾル粒子の様々な波長（375～781 nm）における光吸収の強さ。トルエン起源の粒子は共存する窒素酸化物の濃度が高いほど、イソプレン起源の粒子は共存する二酸化硫黄の濃度が高いほど、紫外から短波長可視（紫や青色）領域での光吸収が大きいことがわかる。

# 植物の根へ酸素を供給する仕組み

中園 幹生 大学院生命農学研究科教授

地球規模の気候変動等の影響により、今後降水量の増加する地域と減少する地域がはっきり分けられると予測されています。特に日本を含むアジアの地域では、集中豪雨の増加や大雨による洪水などの問題が深刻化する可能性が高いと考えられています。イネを除く世界の主要作物は、土壌が過湿状態になると根が酸欠になり生育不良を起こし、最終的には収量の低下を来たします。これらの作物に高い耐湿性を付与するためには、植物の低酸素ストレスに対する応答機構を理解する必要があります。そこで私の研究室では、イネが水田で普通に生育でき、他の作物と比べ高い耐湿性をもつ理由を明らかにし、さらにその知見を生かして、トウモロコシやコムギなどの畑作物の耐湿性向上を目指した研究を行っています。

## 植物体内の酸素供給に重要な通気組織

植物の根の周りの土壌が過湿状態になったときに、根の呼吸に必要な酸素は、茎葉部から根端部

へと植物体内を拡散によって移動することで供給されることが知られています。植物組織内でその酸素の供給に関与する細胞間隙を通気組織(aerenchyma)と呼んでいます。通気組織は、大気中の酸素を根に供給するだけでなく、土壌に蓄積したガス(メタン、二酸化炭素など)を大気中に放出する役割も担っています。通気組織はその形成方法の違いにより破生通気組織と離生通気組織に分類されます(図1)。イネ科植物の根にみられる破生通気組織は、根の皮層組織の細胞がプログラム細胞死を起こすことで形成されます(図1)。

破生通気組織の形成過程で植物ホルモンの一つであるエチレンの生合成酵素の活性が高まることから、以前より、根に蓄積したエチレンが破生通気組織形成の重要な因子であると考えられていました。しかし、過湿土壌条件下においてどのような機構でエチレン生合成が活性化され、さらにエチレンがどのようにして破生通気組織形成を制御するかについては不明なままでした。最近、私た

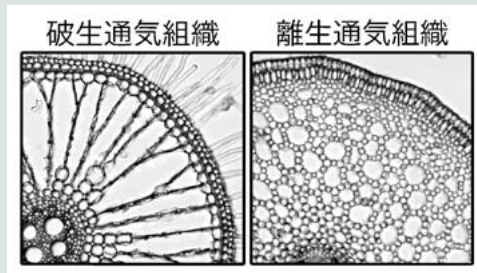
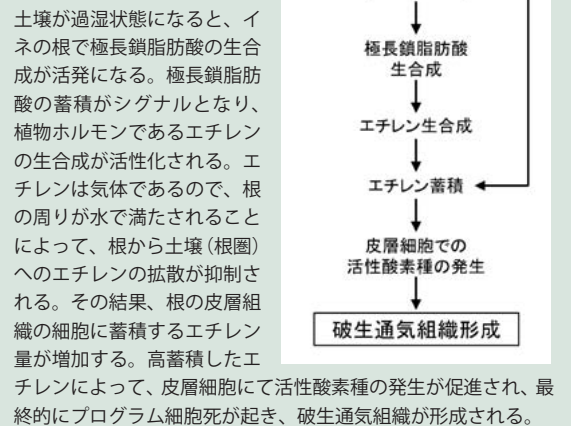


図1 植物の通気組織の形成パターン  
(左) イネの根に形成される破生通気組織。皮層組織にてプログラム細胞死が起きることによって、空気の通り道になる空隙が形成される。(右) ショウブの根に形成される離生通気組織。根の成長過程で、皮層組織にて特殊な細胞分裂と細胞伸長が行われることによって、空隙(細胞間隙)が形成される。両方の図とも根の横断切片の写真である。

図2 イネの破生通気組織形成の調節機構



ちの研究で、根の周りが低酸素状態になると、極長鎖脂肪酸の生合成が活性化されることによって、エチレンの生合成酵素遺伝子の発現が誘導され、根の中のエチレンの蓄積量が増加することが分かりました（図2）。さらにエチレンは、根の皮層組織において活性酸素種の発生を促すことが明らかになりました。この活性酸素種の発生が引き金となり、皮層組織でのプログラム細胞死が起き、破生通気組織が形成されることが分かりました（図2）。

### 根端への効率的な酸素供給に寄与する酸素漏出バリア

多くの植物において、根の基部から根端に向かって通気組織内を移動する酸素は、その大部分が基部で根の外側（根圏）に漏出することが知られており、この酸素漏出を Radial Oxygen Loss (ROL) と呼んでいます（図3）。コムギやオオムギなどは、破生通気組織を形成できますが、茎葉部から供給される酸素の大部分が ROL によって損失するために、根端での呼吸に必要な酸素を十分に供給することができません。しかし、イネでは、根の基部の外層に ROL を抑制するバリアを形成することによって、根端までの酸素輸送を効率化していることが分かっています（図3）。この ROL を抑制するバリアは、ROL バリアと呼ばれています。根の基部に ROL バリアが形成されると、根端へ十分な酸素を供給できるので、根端での細胞分裂が維持されて、根が伸長できます。

### 今後の展望

過湿土壌条件下で植物が障害を受けずに生育するためには、通気組織と ROL バリアの両方の形

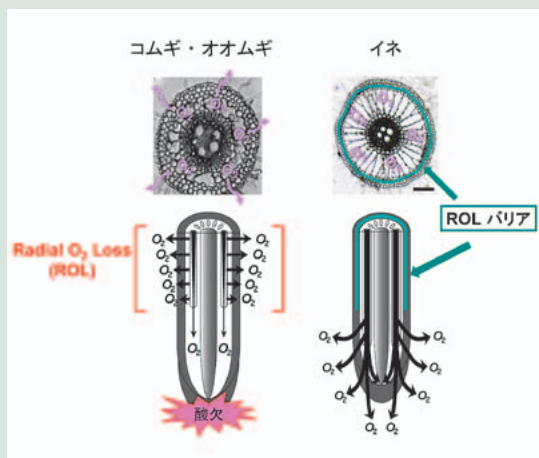


図3 酸素漏出バリア形成による根端への効率的な酸素供給  
 (左) コムギやオオムギの根では、基部の通気組織から土壌中への酸素漏出 (Radial Oxygen Loss : ROL) が起きてしまう。その結果、酸素要求量の多い根端まで十分な酸素が供給されなくなり、根端が酸欠状態になる。(右) イネの根では、基部の外層に ROL バリアが形成されるので、根の基部からの酸素漏出を防ぐことができ、根端まで効率的に酸素を供給できる。

成によって、根端へ効率的な酸素供給を行うことが重要になります。現時点では ROL バリアの構成成分や形成機構などは不明ですが、私たちは ROL バリアを形成する植物と形成しない植物を交配した材料を用いた遺伝学的な解析を進めていますので、近い将来 ROL バリア形成に関わる遺伝子を同定し、ROL バリアの形成機構を明らかにできると考えています。このように、通気組織および ROL バリアの形成機構を解明することは、過湿土壌への植物の適応戦略の理解が深まるだけでなく、重要な畑作物であるトウモロコシやコムギなどの耐湿性向上の一助になると期待されます。

1990年名古屋大学農学部卒業、1995年東京大学大学院博士課程修了後、東京大学助手、助教授（途中から准教授）を経て、2010年より現職。2001年に1年間、米国アイオワ州立大学に客員研究員として滞在し、植物組織を対象としたレーザーマイクロダイセクション法を開発した。現在は、作物の耐湿性の強化を目指して、植物の過湿ストレスに対する応答・適応機構の解明を進めている。研究者としてのモットーは信じる道を突き進むことであり、教育者としては「春風に座すが如し」の教育の実践を目指している。趣味は城めぐり、鉄道旅行。

なかその みきお



# 情報学部・大学院情報学研究科看板除幕式及び 大学院情報学研究科附属価値創造研究センター看板上掲式を挙

●情報学部・大学院情報学研究科



看板を掲げる村瀬学部長・研究科長（左）、総長（右）

平成29年4月1日より新しく発足した情報学部・大学院情報学研究科は、4月6日(木)、情報学研究科棟玄関において、看板除幕式を挙りました。

同学部・研究科は、情報文化学部と大学院情報科学研究科を発展的改組した新しい部局です。

情報学部では、文理を超えた様々な視点から「情報」をとらえ、「情報」を学問として体系づけるとともに、領域の融合による新しい情報学の発展を目指して設置され、情報科学技術に関する基礎知識と、自然や社会をシステムとして普遍的に理解する能力を涵養することにより、人類の直面する課題を解決し、新しい価値を生み出せる人材を育成することを目指しています。

また、大学院情報学研究科では、革新的な情報科学技術と自然や社会に対する普遍的理解を駆使して、新たな価値を創造するための総合的学問（情報学）を構築し、その情報学を深く理解することを通して、情報科学技術の革新に寄与できる人材や、情報科学技術をコアとするモノづくりや社会・組織の仕組み等をデザインできる人材の養成を目指しています。



看板上掲する武田センター長（左）、村瀬研究科長（右）

除幕式では、多くの教職員が見守る中、村瀬学部長・研究科長から、新組織が発足に至るまで多数の関係者の協力があったことへの謝辞とともに、同学部・研究科の特色を生かして、結束して教育研究を行いたいとの思いが述べられました。続いて、松尾総長から情報化社会の一翼を担う同学部・研究科への期待を込めたメッセージが送られ、その後、関係者による看板の除幕が行われ、同学部・同研究科の今後の発展を祈念しました。

引き続き、同時に開設された大学院情報学研究科附属価値創造研究センターの看板上掲式をセンターが設置された理学部B館で挙りました。

同センターは、基盤研究部門、人材育成部門、インキュベート部門の3部門から構成され、情報学の考え方・方法論を駆使して人類の幸福を増大する価値創造に関わる研究を通じて人材を育成し、人類が直面する課題解決に貢献することを目的としています。今後の活動として、外国人研究者の招聘を行い、教員との相乗効果を見込みながら、人工知能・データサイエンスなどの情報学の方法論を価値創造・課題解決に適用することを通じて、ソサエティ5.0、モビリティ、材料情報、医療情報、農業情報、社会デザイン等の最新テーマを取り扱うなど、我が国における情報学の拠点形成を目指しています。また、大学内のシーズを一般社会での価値創造につなげることができる情報人材育成の教育研究組織としての役割も担っています。

看板上掲式では、村瀬研究科長及び武田センター長によるあいさつがあり、その後、センターの施設見学会とともに式典は無事終了しました。

## 大学院人文学研究科の看板除幕式を挙

●大学院人文学研究科

大学院人文学研究科は、4月6日(木)、文学部棟玄関において、同研究科の看板除幕式を挙りました。

同研究科は、「大学院文学研究科」と「大学院国際言語文化研究科」そして「大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻」の2部局1専攻を統合再編した新しい研究科として平成29年4月1日に発足しました。



看板除幕式の様子

同研究科は、人文諸学に関する幅広い理解を基盤とし、日本及び世界で活躍できる研究者・高度専門職業人及び高い言語能力と優れた異文化理解力を兼ね備え、国際社会及び地域社会の諸問題に対応できる人材の養成を目指しています。

除幕式は、松尾総長、松下理事、木俣副総長の臨席のもと、同研究科からは佐久間研究科長をはじめ多数の関係者が出席して執り行われました。

はじめに、佐久間研究科長から、「この統合は人文学の機能強化に向けた第一歩であり、人文学研究科、文学部の学生はもちろん、文系理系を問わず、他部局の学生に対しても、人間性を高め、勇気ある知識人にふさわしい教養が身につけられるような教育研究活動に取り組んでいきたい」との抱負を述べられました。

続いて、総長から、人文系の再編は、国立の大規模大学では初めてであり、社会からも注目されている。その期待に応えて新しい分野を切り開き、諸課題に応える人材育成・研究に取り組んでいくことを期待する旨の祝辞が述べられました。その後、関係者による看板の除幕が行われ、同研究科の今後の発展を祈念しました。

## 在モンゴル名古屋大学日本法教育研究センター開設10周年記念式典を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

モンゴル国立大学法学部内に設置されている名古屋大学日本法教育研究センター(CJLM)は、3月20日(月)、モンゴル国立大学において、センター開設10周年記念式典を開催しました。

式典には、外部からは高岡正人特命全権大使のほか佐藤睦 JICA 所長などが列席し、本学からも市橋理事、石井法

学研究科長、小畑法政国際教育協力研究センター長など多くの関係者が、開設10周年を祝いました。

この中で、モンゴル国立大学のヤダマー・トゥムルバートル学長は「CJLMの修了生は、現在、モンゴルの法曹人材として大きな役割を果たしており、海外に30ある共同で事業を行っている大学のうち、このセンターはもっとも成功している事業のひとつだ」と述べ、CJLMのこれまでの成果を評価しました。

続いて、第二部では修了生及び在校生からの成果報告があり、現在、弁護士として法律事務所で働くかたわら、モンゴル国立大学法学部で専任講師を務める修了生のサランゲレル・バトバヤル氏(2期生)は、「日本との比較を通して自分の国の法律を積極的に学ぶことができ、人間としても成長することができた」とCJLMで学んだ5年間を振り返りました。

CJLMは、2006年9月に開設され、41名いる修了生のうち、現在までに19名が大学院法学研究科に進学しています。そして在學生47名も、弁護士や研究者として活躍し始めている先輩たちの背中を見ながら、モンゴルの将来を担う法曹人材となるべく勉強に励んでいます。



記念式典後の集合写真

## 第2回理学部装置開発室公開講座「3D工房」を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、3月21日(火)、東山キャンパスにおいて、理学部装置開発室で2回目となる公開講座を開催しました。本講座は、同研究科や博士課程教育リーディングプログラム（フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム）などで行われている最先端の科学研究や装置開発室の研究支援を、広く一般の方に興味を持ってもらうことを



講座の様子

目的に開催しました。

「3D工房」をテーマとして、受講生が3D-CAD (Solid Works) を操作してモデリングを行い、モデリングを3Dプリンタで造形する製造工程を体験しました。

受講生は、小型万力を造るために初めての3D-CAD の操作に戸惑いながらも操作方法を覚え、自由な模様や形状に小型万力をデザインしました。そして、自分達がモデリングした形に、3Dプリンタが少しずつ造形している光景を観察し、実際に形になったものを手に取り楽しんでいました。3Dプリンタを活用した研究事例の説明を熱心に聞いている様子から、一般の方の3D-CAD や3Dプリンタへの関心の高さを感じることができました。その後装置開発室を案内し、大学内でものづくりをする現場も見学しました。

今回は、学外の高校生から社会人、学内の学生、研究者、職員、教員、留学生まで幅広く参加しました。実習形態の講座ですが定員は25名と多くの方が参加できるようにし、各受講生に対して印象強い講座にしました。今回の経験を踏まえ、よりよい講座にして今後につなげていく予定です。

## モンゴル政府主催地震防災ワークショップを共催

●減災連携研究センター、大学院環境学研究科

本学がモンゴル国立大学内に共同設置しているレジリエンス共同研究センターは、3月17日(金)、モンゴル国立大学においてモンゴル政府主催の地震防災ワークショップを共催しました。モンゴルでは地震災害対策の推進が国家的課題となっているため、モンゴル政府は今年から3月22日を防災の日と定め、翌23日(木)に政府主導による本格的な

地震防災訓練が計画されました。同ワークショップはそのための啓発活動の一環として開催されたものです。

同ワークショップはモンゴル国のオハナー・フレルスフ副首相が担当し、トゥヴシン・パドラル非常事態庁長官の司会の下、フレルスフ副首相のほか、鈴木康弘減災連携研究センター教授とスヘー・バートルガ モンゴル国立大学国際関係行政学部長が講演を行いました。会場には政府職員や大学教職員のほか、防災を学ぶ学生が約250名集まり、2時間にわたって活発な討論が行われました。モンゴルでは過去に活断層が大地震を引き起こしたことがあるものの、日頃は地震がほとんど起こらないため、防災意識を喚起することが難しい状況にあります。その問題を改善することが同ワークショップの目的であり、日本の経験から地震防災の心構えと対策のあり方を学ぶことが意図されました。同ワークショップの内容はテレビ収録され、3月22日(水)にモンゴル国営放送などで全国放送されました。また非常事態庁からも引き続き web 配信されています (<http://nema.gov.mn/?p=22200>)。なお、3月23日(木)午後4時にはモンゴル全土でサイレンが鳴らされ、ウランバートル中央広場においても大規模な地震防災訓練が実施されました。



地震防災ワークショップの様子 (司会：パドラル非常事態庁長官、右から2番目：フレルスフ副首相)

## 大学教育改革フォーラム in 東海2017を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、3月25日(土)、金城学院大学キャンパスにおいて、「大学教育改革フォーラム in 東海2017」を開催しました。このフォーラムは、東海地区の教職員がボランティアで運営を行い、教育実践や職務実践の事例紹介と共有を進めるフォーラムです。12回目の開催となる今回は、大学や高校の教職員を中心に170名の参加者・



分科会での議論の様子

発表者が全国各地から集まりました。当日は、日向野幹也早稲田大学教授による基調講演「新しいリーダーシップ教育とディープ・アクティブラーニング」の他、11の分科会、ポスターセッションがあり、活発な議論が交わされました。

基調講演では、リーダーシップ教育プログラムの開発を中心に議論が進められ、権限・役職・カリスマと関係のないリーダーシップとして、目標共有、率先垂範、同僚支援の3つの行動を中心とする教育の重要性が指摘されました。

分科会では、「キャリア教育」、「学生がよく学ぶ成績評価を設計する」、「物理教育におけるアクティブラーニングとその評価」、「学生の『資質・能力』の育成」、「自校教育にどのように取り組んだか」、「図書館・情報部門における学修支援」、「高大接続・初年次教育」、「産学連携・入試制度」等、11テーマに沿って進められました。同センターでは今後ともボランティア教職員による実行委員会を支援し、東海地域の大学教育の質向上へ貢献していきます。

## ミクロの探検隊®を開催

●博物館

博物館では、4月15日(土)、医学教育研究支援センター分析機器部門と日立テクノロジーズの協力を得て、「ミクロの探検隊®-ホニュウ類の組織を電子顕微鏡でみよう!」を開催しました。

ミクロの探検隊®は、博物館が2007年から行っている電子顕微鏡を使用した体験型次世代教育で、今回は、小学5



説明を聴く様子

年生から中学生を中心に17名の参加がありました。まず、参加者自身がタマネギの細胞と口内粘膜のプレパラートを作り、生物顕微鏡の使い方と植物、動物細胞を学習しました。次にラットの主な組織標本を生物顕微鏡で観察し、各組織の構造や働きの説明を受けました。さらに、走査型電子顕微鏡を使用して、小腸、腎臓、気管、舌を観察し撮影しました。同じラットでも、臓器によって組織・細胞の構造も全く違い、それぞれの働きによって、構造がより機能的に変化(分化)していることを学びました。気管の線毛や小腸の微絨毛、糸球体の微細構造などが鮮明に観察でき、参加者はどんどん科学の世界に引き込まれていきました。今回も「また参加したい、もっと電子顕微鏡で見たい」などの声が寄せられました。

## セミナーハウス展示「写真展－博物館友の会写真サークル」を開催

●博物館



展示の様子

博物館では、2月10日(金)から3月24日(金)までの間、博物館野外観察園セミナーハウス2階において、「写真展－博物館友の会写真サークル」を開催し、343名の来園がありました。この展示は同館友の会のサークル活動の一つである写真サークルが一年間の成果を披露する場となっており、今回で3回目です。自由な題材で、会員10名の作品30点を展示しました。動物や人の動きの瞬間をとらえた作品、風景写真も美しい作品からメッセージ性のある作品、過去の記憶を思い出させる作品など、どれも個性あふれる力作が揃いました。デジタルカメラが主流な中、フィルムカメラを用いて多重露光という、2つの写真を一枚に写しこむ手法に挑戦した作品もあり、幻想的な印象をかもし出していました。散歩途中などにたまたま見かけて立ち寄りた方も多かったようです。

## 第68回名古屋大学博物館コンサート(NUMCo)を開催

●博物館



会場と一体になって演奏するティエラブランカ

博物館は、3月25日(土)、展示室において、平成28年度最後のコンサート「アンデス音楽への旅 白い大地・風紡ぐ歌」を開催しました。南米民族音楽を演奏するティエラブランカのリーダー村瀬直司氏は「博物館での演奏は、2010年を皮切りに今回で4度目。毎回楽しみに来てくださる方の熱い眼差しと温かい声援の中で、アンデス音楽、民族の歌を紹介できることを喜び、感謝している」と語っていました。当日の来場者は244名と立ち見も出る盛況で、良く知られている「コンドルは飛んで行く」、「花祭り」の他に「マリポーサ(蝶々)」、「ワヤヤイカ」など全11曲が演奏され、会場と奏者が一体となった楽しい1時間半を過ごしました。また、楽器体験コーナーなどが設けられ、博物館らしいコンサートとなりました。今後の予定は

9月20日(水) アイルランド音楽 小松 大、他

10月14日(土) テノール・ソプラノコンサート 井原義則、他です。ぜひ、ご来館ください。

## 第129回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する岡村部長

減災連携研究センターは、4月13日(木)、減災館1階減災ホールにおいて、第129回(今年度第1回)の防災アカデミーを開催しました。今回は、岡村次郎国土交通省中部地方整備局企画部長が「中部地方整備局における南海トラフ巨大地震に対する取組～東日本大震災を踏まえて」と題した講演を行い、128名の参加がありました。

岡村部長は2009年4月から2011年6月まで、内閣府の防災担当についており、2011年3月11日の東日本大震災の時にも、まさに国の中枢で活躍されました。今回の講演では、南海トラフ巨大地震で予測される災害について分かりやすく説明し、さらに中部地方整備局の取り組みを紹介するとともに、自身の経験も踏まえて、来たるべき地震への備えについて説明しました。特に、内閣府での経験から、「事前に勉強していたこと」がいざという時に役立つということを強く主張しました。





## 言語の本質を探究する

町田 健 大学院文学研究科

私が名古屋大学文学部に赴任したのは、1998年でした。それから19年在職して、この3月末で退職し、母校である久留米大学附設中学校・高等学校の校長として、この4月より勤務しています。名大に所属した19年は、私の年齢が40歳から59歳まででしたから、当然のこととは言え、最も充実した研究を進めることができた時期でした。専門は言語学の中でも、ラテン語からフランス語への文法的な変化の分析だったのですが、名大にきた当初は、日本語の主題（「は」）が、一般言語学的にどのような特性を持っているのかを解明することに取り組みました。これについては、自分なりに一つの結論を得て、論文もいくつか発表したのですが、後になって、それでは「は」が持つすべての機能を説明することはできないことに思い至りました。しかしその後は、言語の形態的特

徴という観点からの類型と、各言語の基本語順との間に関連性が認められるという事実をもとに、基本語順を決定する普遍的な原理を明らかにすることを目的とする研究に専念したため、主題の本質については未解決のままでした。語順を決定する原理については、数学的・論理的な厳密性を担保しながら解明を試み、これについて研究書を上梓したものの、結論が説得的だったかについては不安もあります。ただ、やり残していた主題については、近年ようやく全体的な解決をつけることができるようになり、研究の一区切りができたと考えています。



## 学ぶことの多かった名古屋大学での仕事

松田 武雄 大学院教育発達科学研究科

国立大学を4校異動し、最後の4校目に母校に着任して退職を迎えることになりました。久しぶりに戻った母校は、外観が大きく変わっていましたが、自由な気風は変わっていませんでした。しかし、時代の流れの中で、大学運営は厳しさを増し、学生時代に過ごしたような雰囲気を保つことは難しく、政策対応に追われる日々が強まっていったように思います。8年半という短い職期間でしたが、評議員、研究科長、名大附属高校・中学校長と、管理職を務める中で、そのことを身をもって経験しました。

とはいえ、最後の国立大学で、いくつかの管理運営の職に就き、たくさんのことを学ぶことができました。名古屋大学にどれだけ貢献できたのか、その評価は別として、私自身は、それまでの研究教育生活では経験できないような仕事に従事

することができたことに満足しています。特に、3月まで務めていた校長職は、大学しか経験していない私にとっては異文化の世界であり、本来であれば大学教員として終わるはずが、中学・高校という教育現場に身を置くことができたことは幸せでした。最初はとまどうことが多かったのですが、次第に学校生活にも慣れ、校長としての仕事を楽しむことができました。任期途中で校長職を辞することになったのは残念ですが、この経験を今勤めている大学で活かしたいと思っています。



## 名古屋大学「卒業」にあたって

國枝 秀世 大学院理学研究科

1969年4月に名古屋大学に入学してから48年経ってようやく公式に卒業しました。とは言えまだ単位未修（後任理事への引き継ぎ不足）のために、あと1年居残り（審議役）でお手伝いをすることになりました。この原稿を書いている今は「指定国立大学」の申請に全力を上げています。松尾総長の「序列を変える」と言う心意気に感じ、名古屋大学が世界のトップレベルを目指すべく申請をまとめています。学生の時から、陸上競技の七大戦において東や西の大学に激しい闘志を燃やして来た私としては、血の騒ぐ状況です。名古屋大学が、世界に光り輝く研究大学であるにはどうしたら良いか、それだけを考えて提案を議論しています。文科省に「指定」のスタンプを捺されるかどうかに関わらず、提案施策を実施することにより、後に続く皆さんが世界に躍進すること

を願っています。評価は後からついて来るに違いありません。もう一つ気がかりなのは今年、名古屋で開催する七大戦です。主催校として総合優勝して欲しいと思い3年前から陸上競技部は勿論、体育会にもハッパをかけて来ました。名古屋大学の学生に私が言い続けたことは、「名古屋の学生は力が有りながら一歩前に出ないので損をしている。精神的にこれを乗り越えよ」です。競技においても学問においても、あらゆる場面で名古屋の出身者が世界に羽ばたいて欲しいと心から願っています。



## 名古屋大学の生活を振返って

植村 和正 大学院医学系研究科

昭和61年の大学院入学からアメリカ留学、そして帰国後も「中枢神経性糖代謝調節」の研究に没頭しました。

平成10年からは総合内科診療と学生や研修医指導に明け暮れ、平成17年に総合医学教育センター教授に就任いたしました。

日本老年医学会で「『高齢者の終末期の医療およびケア』に関する日本老年医学会の『立場表明』」の立案に携わったことは、その後の生命倫理委員会委員長の職務遂行に大きく役立ったと思います。

教授就任後は、法人評価担当の総長補佐を担当させていただき、名大病院では人事労務を担当しました。法人化によって組織が大きく変貌する時期でしたので、掛け替えのない経験をさせていただいたと感謝しております。また、卒後臨床

研修の必修化もありました。関連病院や愛知県内の他の3大学病院と共闘して研修医募集定数の確保に必死に奔走したことが思い起こされます。

退職を控えた今、このような諸事を今振り返るとき、偶然にその時そこに居たという理由で色々なことを経験できたことは人生の大きな幸運でした。

卒前から卒後、生涯にかけての医療職教育の一元管理については、平成25年度に供用を開始したクリニカルシミュレーションセンターが順調に稼働しており、昨年度より活動を開始した看護キャリア支援室とともに、すべての医療職のキャリアアップへの支援体制が少しずつですが整いつつあります。

これまでの皆様のご支援に心より感謝申し上げます。



## 技術者教育への道

田川 智彦 大学院工学研究科

1972年に名古屋大学工学部応用化学科に入学以来、途中、カナダ国立研究所研究員2年9か月、東工大助手4年を除き、ずっと名古屋大学で過ごさせていただきました。退職にあたり母校より名誉教授の称号をいただくことは感無量です。と同時に、恩師の先生方、先輩方、同僚の皆さん、学生の皆さんに改めて感謝申し上げます。この間、なにか目に見えない力によって道が切り拓かれてきたように感じております。研究分野は、有機化学から始まり触媒化学、分光学、無機材料工学そして化学工学（反応工学）と大きく変遷しました。一方で、技術者教育のあり方について勉強する機会も得ました。JABEE（日本技術者教育認定機構）設立のお手伝いをするとともに技術者教育システムを導入し、初めての認証を受けました。その後、工学研究科教務委員長として、本

学の工学教育のかじ取りを拝命し、引き続き、副研究科長として、平成29年度工学部・工学研究科改組にともなう教育体制の設計に取り組みました。ここでも、多くの先生方や事務職員の皆さんに支えていただいたことをこの場を借りて御礼申し上げます。このたび、こうした経験を活かし、若い技術者の教育に専心するため、定年まで2年を残して名大を退職し、豊田工業高等専門学校に校長として着任いたしました。

長い間、本当にお世話になりました。心から御礼申し上げますとともに、工学研究科そして名古屋大学の益々のご発展を祈念いたします。



## 馬の口とらえて

大沢 健夫 大学院多元数理科学研究科

「ああ寂しい」という感覚を久しぶりに味わったような気がする。26年前、京都に家族を残して教授として名大に赴任した時と似ている。そんなことを、オフィスの整理が済んだ後、春の景色に見とれながら思っていた。あの時は最初、大学まで徒歩で通えるアパート暮らしで、行き帰りの道すがら買ったマグカップをまだ持っている。小学生の時、一つの筆箱を6年間使い、母親に「物持ちが良い」と褒められたことを思い出す。もっと付き合いが長いのは、ドイツに長期滞在した時に小さな店で買った手動式のタイプライターだ。これでいくつも論文や講演原稿を打った。手動が電動になり、さらにデジタル化ということになって、このタイプライターも部屋の片隅で埃をかぶっていた。この度お別れのつもりで机の上に置き、目立った汚れを落としてやった。洗剤をつけた

スポンジでゴシゴシやるうち、情が移るといえるのか、「まだいっしょにいたいのに」とでも言われているようでグッと来るものがあつた。昔教わった「奥の細道」の冒頭の一節に、「馬の口とらへて老をむかふる者」とあつたが、愛馬をいたわる馬子の姿と、硯を撫でる文人墨客と、そして役目を終えたタイプライターを磨く今の自分と、気持ちの上でいかほどの差があるか。かたじけなくも名誉教授の称号を頂いて初めて、自分も馬の口をとらえて老いを迎えたことを悟ったのであつた。

## 名大を表敬訪問された方々 [平成29年1月16日～4月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
2月1日	国際機関	国際連合食糧農業機関駐日連絡事務所所長の来訪	表敬訪問及びインターンシップ覚書調印
2月2日	インドネシア	ガジャマダ大学理学部副学部長の来訪	表敬訪問
2月2日	モンゴル	モンゴル教育文化科学スポーツ省、モンゴル国立教育大学等から12名の来訪	表敬訪問及び大学院教育発達科学研究科への訪問
2月8日	中国	吉林大学国際部部长ほか1名の来訪	表敬訪問及び学生交換等についての懇談
2月23日	エチオピア	エチオピア連邦民主共和国教育国務大臣ほか	学術交流についての懇談
3月14日	カナダ	在日カナダ大使館首席公使の来訪	表敬訪問
3月14日	オーストラリア	西オーストラリア大学から5名の来訪	生命農学研究科とのジョイントディグリーについての打合せ
3月23日	韓国	韓国教育部行政官7名ほか2名の来訪	表敬訪問
3月29日	中国・韓国	日中韓三国協力事務局代表団から6名の来訪	表敬訪問及び日中韓の教育・人材交流についての懇談
4月12日	フランス	トゥール大学副学長、ポワティエ大学副学長ほか2名の来訪	表敬訪問及び学術交流についての懇談

## 新たに締結した学術交流協定 [平成29年1月16日～4月15日]

### 大学間学術交流協定

締結日	国/地域	大学/研究機関名
1月20日	シンガポール	南洋理工大学
3月20日	モンゴル	モンゴル自然環境・観光省

### 部局間学術交流協定

締結日	国/地域	大学/研究機関名	部局名
11月28日	シンガポール	南洋理工大学 国立教育研究所 ※	教育学部・教育発達科学研究科
1月4日	イスラエル	テルアビブ大学物理・天文学部 ※	素粒子宇宙起源研究機構
2月14日	シンガポール	シンガポール国立大学アジア法研究センター (CALS)	法政国際教育協力研究センター
2月21日	台湾	台湾国家理論科学研究センター数学研究部門	情報基盤センター
3月13日	アメリカ	オハイオ州立大学データ変換分析研究所	情報学研究科
3月16日	フランス	ランス・シャンパーニュ・アルデンヌ大学、ランス数学研究所	大学院多元数理科学研究科
3月22日	台湾	国立中央大学理学院	情報基盤センター

※名大トピックス No. 285 (2月号) からの追加

## 構成員を対象とした研修 [平成29年1月16日～4月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
1月31日(火)、 2月2日(木)	会計基準研修	国立大学法人会計基準を理解し、本学における財務会計処理の理解を深め、財務会計処理における説明責任を果たすための知識の習得を図る	33名
2月21日(火)	財務会計事務説明会	財務会計事務を円滑に行うため、実務担当者を対象に実施	204名
2月28日(火)	国立大学法人運営費交付金等に関する説明会	国立大学法人運営費交付金関連予算案の概要及び国立大学を取り巻く諸課題について、文部科学省と各大学等の財務実務担当者との間で、情報交換等を行い共通認識を持つことにより、円滑な業務遂行を図る	126名
3月29日(水)	ネットワーク・サーバ管理者のための情報セキュリティ講習会	ネットワーク・サーバ管理者(教職員、学生等) Linux サーバの管理をしている、またはする予定の方へ、最近のセキュリティインシデント動向および Linux サーバにおけるセキュリティ対策について紹介する	13名
4月3日(月)～ 4月12日(水) まで、計28回	ハラスメント防止研修	構成員のハラスメントに対する認識を深め、防止意識を高めるため	4,395名
4月4日(火)～ 13日(木)	平成28年度新規採用職員研修	本学新規採用職員に対し、法人職員としての心構えを身につけると共に、社会人として必要な業務遂行上の基礎知識及び能力を養成する	40名

## 新任役員等の紹介

### ●理事・副総長（研究・男女共同参画担当）

高橋 雅英  
(たかはし まさひで)



専門分野：病理学  
〈略歴〉

昭和58年4月 ハーバード大学医学部ダナファーバー癌研究所  
Research Fellow  
昭和60年11月 愛知県がんセンター研究所研究員  
平成2年4月 名古屋大学医学部助手  
平成3年1月 名古屋大学医学部講師  
平成7年6月 名古屋大学医学部助教授  
平成8年7月 名古屋大学医学部教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院医学研究科教授  
平成14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科教授  
平成15年4月 名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・  
腫瘍分子医学研究センター長  
平成20年3月 名古屋大学大学院医学系研究科附属教育研究  
支援センター長  
平成24年4月 名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長  
平成29年4月 名古屋大学理事（研究・男女共同参画担当）・副総長

### ●理事・事務局長（人事労務・環境安全・事務総括担当）

磯谷 桂介  
(いそがい けいすけ)



〈略歴〉

昭和59年4月 文部省社会教育局青少年教育課  
昭和61年4月 放送大学学園総務部総務課  
昭和62年4月 放送大学学園総務部総務課企画法規係長  
昭和63年1月 文化庁文化部文化普及課企画調査係長  
昭和63年4月 文化庁文化部文化普及課企画調査係長  
平成元年8月 文部省高等教育局企画課法規係長  
平成2年11月 石川県企画開発部参事  
平成5年4月 文部省初等中等教育局中学校課生徒指導専門官（兼）  
課長補佐  
平成6年4月 北陸先端科学技術大学院大学助教授  
平成12年4月 文部省学術国際局研究助成課研究協力室長  
平成13年1月 文部科学省研究振興局研究環境・産業連携課技術移転推進  
室長  
平成14年8月 文部科学省研究開発局地震調査研究課長  
平成15年4月 文部科学省研究開発局地震・防災研究課長  
平成16年4月 東北大学総長主席補佐  
平成18年10月 文部科学省研究振興局学術研究助成課長  
平成20年8月 文部科学省初等中等教育局児童生徒課長  
平成23年4月 政策研究大学院大学大学運営局長  
平成24年8月 文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術総括官（兼）  
政策課長  
平成25年10月 文部科学大臣官房審議官（研究開発局担当）  
平成27年4月 文化庁長官官房審議官（兼）  
内閣官房知的財産戦略推進事務局次長  
平成28年4月 文化庁長官官房審議官（兼）  
内閣府知的財産戦略推進事務局次長  
平成29年1月 名古屋大学理事（人事労務・環境安全・事務総括担当）・  
事務局長

### ●副総長（法務・人権・リスク管理・内部統制担当）

和田 肇  
(わだ はじめ)



専門分野：労働法  
〈略歴〉

昭和57年5月 名古屋大学法学部助教授  
平成3年4月 名古屋大学法学部教授  
平成11年4月 名古屋大学大学院法学研究科教授  
平成14年4月 名古屋大学評議員  
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員  
平成16年4月 名古屋大学大学院法学研究科副研究科長  
平成18年4月 名古屋大学総長補佐（人事労務・人権（苦情処理）担当）  
平成27年4月 名古屋大学高等研究院副院長  
平成27年4月 名古屋大学ヨーロッパセンター長  
平成29年1月 名古屋大学副総長（法務・人権・リスク管理・内部統制担当）

## 新任部局長等の紹介

### ●大学院人文学研究科長・文学部長

佐久間 淳一  
(さくま じゅんいち)



専門分野：言語学  
(略歴)

平成4年11月 名古屋大学文学部講師  
平成8年5月 名古屋大学文学部助教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科助教授  
平成19年4月 名古屋大学大学院文学研究科准教授  
平成20年4月 名古屋大学大学院文学研究科教授  
平成22年4月 名古屋大学総長補佐（入試担当）  
平成24年4月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長  
平成25年4月 名古屋大学総長補佐（入試担当）  
平成27年4月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長  
平成29年4月 名古屋大学大学院人文学研究科長・文学部長

### ●大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

植田 健男  
(うえだ たけお)



専門分野：教育経営学領域（教育科学専攻）  
(略歴)

昭和59年4月 京都大学教育学部助手  
昭和62年4月 大阪経済大学講師  
平成2年4月 名古屋大学教育学部助教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授  
平成12年11月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授  
平成18年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長  
平成19年4月 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校長  
平成22年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長  
平成22年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員  
平成25年4月 名古屋大学学生相談総合センター長  
平成25年4月 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校長  
平成28年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科副研究科長  
平成29年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科長・教育学部長

### ●教育学部附属中学校・高等学校長

中嶋 哲彦  
(なかじま てつひこ)



専門分野：教育行政学領域（教育科学専攻）  
(略歴)

昭和61年4月 久留米大学講師  
平成2年4月 久留米大学助教授  
平成10年4月 名古屋大学教育学部助教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授  
平成14年5月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授  
平成29年4月 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校長

### ●大学院情報学研究科長・情報学部長

村瀬 洋  
(むらせ ひろし)



専門分野：画像認識  
(略歴)

昭和55年4月 日本電信電話公社研究員  
昭和62年2月 日本電信電話株式会社基礎研究所主任研究員  
平成4年4月 日本電信電話株式会社基礎研究所主幹研究員  
平成13年10月 日本電信電話株式会社先端技術総合研究所コミュニケーション科学基礎研究所メディア情報研究部部長  
平成15年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科教授  
平成27年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員  
平成27年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科副研究科長  
平成29年4月 名古屋大学大学院情報学研究科長・情報学部長

### ●大学院理学研究科長・理学部長

杉山 直  
(すぎやま なおし)



専門分野：宇宙論  
(略歴)

平成3年4月 東京大学理学部助手  
平成8年4月 京都大学大学院理学研究科助教授  
平成12年4月 国立天文台理論天文学研究系教授  
平成18年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授  
平成22年10月 名古屋大学総長補佐（総長調査戦略担当）  
平成23年5月 名古屋大学高等研究院副院長  
平成23年10月 名古屋大学総長補佐（総合企画調査担当）  
平成24年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員  
平成27年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長  
平成29年4月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長

### ●大学院医学系研究科長・医学部長

門松 健治  
(かどまつ けんじ)



専門分野：分子生物学  
(略歴)

昭和57年4月 福岡市立こども病院外科  
昭和57年11月 九州大学医学部附属病院医員（研修医）  
昭和63年4月 鹿児島大学医学部助手  
平成元年4月 九州大学医学部附属病院医員  
平成2年4月 鹿児島大学医学部助手  
平成2年10月 アメリカ国立衛生研究所客員研究員  
平成5年10月 名古屋大学医学部助手  
平成6年5月 名古屋大学医学部講師  
平成8年8月 名古屋大学医学部助教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院医学研究科助教授  
平成14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科助教授  
平成16年9月 名古屋大学大学院医学系研究科教授  
平成21年4月 名古屋大学総長補佐（創薬科学担当）  
平成24年3月 名古屋大学大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター長  
平成24年4月 名古屋大学総長補佐（研究推進担当）  
平成24年4月 名古屋大学大学院医学系研究科副研究科長  
平成27年7月 名古屋大学予防早期医療創成センター長  
平成29年4月 名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長

## 新任部局長等の紹介

### ●大学院国際開発研究科長

東村 岳史  
(ひがしむら たけし)



専門分野：社会学  
(略歴)

昭和62年4月 ミノルタ株式会社  
平成3年1月 株式会社ユニウエル  
平成7年7月 名古屋大学大学院国際開発研究科助手  
平成9年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科講師  
平成12年2月 名古屋大学大学院国際開発研究科助教授  
平成19年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科准教授  
平成26年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科教授  
平成29年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科長

### ●大学院環境学研究科長

岡本 耕平  
(おかもと こうへい)



専門分野：地理学  
(略歴)

昭和63年10月 名古屋大学文学部助手  
平成3年4月 東洋大学社会学部講師  
平成5年4月 名古屋大学文学部助教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科助教授  
平成13年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授  
平成16年4月 名古屋大学総長補佐(研究推進担当)  
平成28年4月 名古屋大学大学院環境学研究科副研究科長  
平成29年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長

### ●大学院創薬科学研究科長

饗場 浩文  
(あいば ひろふみ)



専門分野：微生物学  
(略歴)

平成元年4月 日本学術振興会特別研究員  
平成2年10月 名古屋大学農学部助手  
平成11年3月 名古屋大学農学部助教授  
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授  
平成19年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科准教授  
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科教授  
平成28年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科副研究科長  
平成28年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員  
平成29年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科長

### ●宇宙地球環境研究所長

草野 完也  
(くさの かんや)



専門分野：宇宙地球環境物理学  
(略歴)

昭和61年4月 日本学術振興会特別研究員  
昭和62年5月 広島大学理学部助手  
平成8年4月 広島大学理学部助教授  
平成10年4月 広島大学大学院先端物質科学研究科助教授  
平成16年9月 独立行政法人海洋研究開発機構グループリーダー  
平成17年11月 独立行政法人海洋研究開発機構プログラムディレクター  
平成21年4月 独立行政法人海洋研究開発機構チームリーダー  
平成21年7月 名古屋大学太陽地球環境研究所教授  
平成24年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所副所長  
平成27年10月 名古屋大学宇宙地球環境研究所附属統合データサイエンスセンター教授  
平成27年10月 名古屋大学宇宙地球環境研究所副所長  
平成27年10月 名古屋大学宇宙地球環境研究所附属統合データサイエンスセンター長  
平成29年4月 名古屋大学宇宙地球環境研究所長

### ●アイソトープ総合センター長

竹中 千里  
(たけなか ちさと)



専門分野：森林環境化学  
(略歴)

昭和60年1月 株式会社富士通研究所研究員  
平成3年11月 名古屋大学農学部助手  
平成9年10月 名古屋大学農学部助教授  
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授  
平成13年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授  
平成15年9月 名古屋大学総長補佐(人権担当)  
平成17年4月 名古屋大学総長補佐(人権(苦情処理)担当)  
平成29年4月 名古屋大学アイソトープ総合センター長

### ●物質科学国際研究センター長

山口 茂弘  
(やまぐち しげひろ)



専門分野：典型元素化学、有機材料化学、  
有機合成化学

(略歴)  
平成5年11月 京都大学化学研究所助手  
平成15年1月 名古屋大学大学院理学研究科助教授  
平成17年3月 名古屋大学大学院理学研究科教授  
平成24年4月 名古屋大学物質科学国際研究センター教授  
平成25年4月 名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所教授  
平成26年4月 名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所副所長  
平成29年4月 名古屋大学物質科学国際研究センター長

## 新任部局長等の紹介

### ●学生相談総合センター長

松本 真理子  
(まつもと まりこ)



専門分野：児童青年期臨床心理学  
(略歴)

昭和54年4月 医療法人成精会刈谷病院心理士  
昭和59年4月 浜松医科大学医学部精神神経医学臨床心理士  
平成元年4月 聖隷学園浜松衛生短期大学講師  
平成5年4月 聖隷学園クリストファー看護大学助教授  
平成13年4月 金城学院大学助教授  
平成16年4月 金城学院大学教授  
平成20年4月 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授  
平成23年4月 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター長  
平成27年4月 名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授  
平成29年4月 名古屋大学学生相談総合センター長

### ●総合保健体育科学センター長

山本 裕二  
(やまもと ゆうじ)



専門分野：スポーツ心理学、運動学習科学  
(略歴)

昭和60年2月 筑波大学文部技官  
昭和61年5月 中京女子大学短期大学部講師  
昭和62年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター講師  
平成7年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター助教授  
平成16年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター教授  
平成20年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター副センター長  
平成26年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター副センター長  
平成29年4月 名古屋大学総合保健体育科学センター長

### ●教育推進部長

小野 幸嗣  
(おの ゆきつぐ)



(略歴)

昭和60年4月 奈良女子大学厚生課  
平成元年10月 文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室  
平成4年10月 文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室主任  
平成5年4月 文部省学術国際局国際企画課国際関係係長  
平成6年4月 文部省学術国際局国際企画課ユネスコ第二係長  
平成7年4月 文部省教育助成局海外子女教育課適応指導係長  
平成10年4月 文部省学術国際局留学生課海外留学係長  
平成11年4月 岡崎国立共同研究機構総務部国際交流課長  
平成13年4月 文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官付国際研究専門官  
平成15年3月 在ヴェトナム日本国大使館  
平成18年8月 文部科学省大臣官房国際課課長補佐  
平成21年7月 文部科学省研究開発局海洋地球課極域科学企画官  
平成22年7月 国際連合教育科学文化機関日本政府代表部一等書記官  
平成23年4月 国際連合教育科学文化機関日本政府代表部参事官  
平成25年9月 東京大学研究推進部長  
平成27年11月 東京大学国際部長兼研究推進部長兼本部国際交流課長  
平成28年1月 東京大学国際部長兼本部国際交流課長  
平成28年4月 東京大学国際部長  
平成29年4月 名古屋大学教育推進部長

### ●研究協力部産学官連携監

加藤 滋  
(かとう しげる)



(略歴)

平成8年4月 豊橋技術科学大学総務部会計課専門職員  
平成12年4月 豊橋技術科学大学総務部会計課情報システム係長  
平成13年4月 豊橋技術科学大学総務部庶務課企画広報係長  
平成15年4月 国立情報学研究所開発・事業部企画調整課共同利用係長  
平成17年4月 情報・システム研究機構事務局財務課課長補佐  
平成17年4月 情報・システム研究機構事務局経営・評価支援室長  
平成20年4月 情報・システム研究機構企画課長  
平成24年4月 名古屋大学研究協力部研究支援課長  
平成27年4月 名古屋大学研究協力部次長兼社会連携課長  
平成28年4月 名古屋大学研究協力部次長  
平成29年4月 名古屋大学研究協力部産学官連携監

### ●施設管理部長

中西 幸博  
(なかにし ゆきひろ)



(略歴)

昭和59年12月 明石工業高等専門学校会計課  
平成4年4月 文部省大臣官房文教施設部高松工事事務所  
平成7年10月 文部省大臣官房文教施設部大阪工事事務所  
平成11年11月 文部省大臣官房文教施設部大阪工事事務所施設係長  
平成16年4月 文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課整備計画室  
企画調査係長  
平成19年4月 岡山大学施設企画部施設企画課長  
平成22年4月 静岡大学財務施設部施設チーム施設課長  
平成24年4月 文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付参事官補佐  
平成25年8月 文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課整備計画室  
室長補佐  
平成28年4月 文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付監理官  
平成29年1月 名古屋大学施設管理部長

### ●附属図書館事務部長

木下 聡  
(きのした さとる)



(略歴)

昭和62年4月 東京大学教養学部図書課  
平成5年10月 東京大学附属図書館総務課  
平成8年4月 京都大学附属図書館情報管理課  
平成10年4月 三重大学附属図書館情報管理課  
平成12年4月 三重大学附属図書館情報管理課学術情報係長  
平成15年4月 三重大学附属図書館情報サービス課参考調査係長  
平成16年4月 三重大学図書・情報部情報サービス課情報リテラシー係長  
平成17年1月 金沢大学情報部図書館サービス課長  
平成18年4月 金沢大学情報部情報企画課長  
平成20年4月 京都大学附属図書館情報管理課長  
平成21年4月 京都大学附属図書館総務課長  
平成24年4月 東京大学附属図書館情報管理課長  
平成26年4月 東京大学附属図書館総務課長  
平成29年4月 名古屋大学附属図書館事務部長

## 新任部局長等の紹介

### ●医学部・医学系研究科事務部長

永家 清考  
(ながや きよやす)



〈略歴〉

昭和55年2月 名古屋大学医学部附属病院医事課  
昭和63年4月 名古屋大学医学部附属病院管理課  
平成6年4月 名古屋工業大学経理部経理課  
平成9年4月 名古屋大学経理部管財課  
平成11年4月 名古屋大学経理部主計課  
平成12年4月 核融合科学研究所管理部会計課司計係長  
平成15年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科管理課司計掛長  
平成16年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科管理課経営企画掛長  
平成18年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営企画課掛長  
平成19年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営企画課専門員  
平成20年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営企画課課長補佐  
平成20年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営分析室長  
平成21年4月 名古屋大学総務部総務課課長補佐  
平成22年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営企画課経営分析主幹  
平成23年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営企画課長  
平成25年4月 大阪大学医学部附属病院総務課長  
平成27年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長  
平成29年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部長

## 資料

### 役員等

総長	松尾 清一
理事 (国際・広報担当)・副総長	渡辺 芳人
理事 (総務・教育・組織改革・学術情報基盤担当)・副総長	松下 裕秀
理事 (財務・施設整備担当)・副総長	木村 彰吾
理事 (学術研究・産学官担当)・副総長	財満 鎮明
理事 (研究・男女共同参画担当)・副総長	高橋 雅英
理事 (人事労務・環境安全・事務総括担当)・事務局長	磯谷 桂介
理事 (大学運営担当)	郷 通子 (学外)†
監事	熊田 一充 (学外)
監事	中谷 聡子 (学外)†
副総長 (評価・総合企画担当)	前島 正義
副総長 (入試・組織改革・学生支援・図書館担当)	木俣 元一
副総長 (法務・人権・リスク管理・内部統制担当)	和田 肇

副理事 (国際関係担当)	磯田 文雄
副理事 (病院担当)	石黒 直樹
副理事 (男女共同参画担当)	東村 博子
副理事 (研究力強化担当)	藤巻 朗
副理事 (国際貢献担当)	岡田 亜弥
参与	伊藤 勝基 (学外)†
参与	小川 宏嗣 (学外)†
参与	房村 精一 (学外)†
参与	徳川 義崇 (学外)†
参与	Giles Clarke (学外)†
参与	鮎京 正訓 (学外)†
参与	武田修三郎 (学外)†

†印は非常勤

### 経営協議会委員

#### 学外委員

トヨタ自動車株式会社代表取締役会長	内山田竹志
中部電力株式会社顧問	川口 文夫
国立病院機構名古屋医療センター名誉院長	齋藤 英彦
株式会社中日新聞社相談役	坂井 克彦
日本ガイシ株式会社特別顧問	柴田 昌治
丹羽連絡事務所代表	丹羽宇一郎
日本アイ・ビー・エム株式会社副会長	橋本 孝之
東海旅客鉄道株式会社特別顧問	松本 正之

(五十音順)

#### 学内委員

総長	松尾 清一
理事・副総長	渡辺 芳人
理事・副総長	松下 裕秀
理事・副総長	木村 彰吾
理事・副総長	高橋 雅英
理事・事務局長	磯谷 桂介
医学部附属病院長	石黒 直樹



## 教育研究評議会評議員

総長	松尾 清一
理事	渡辺 芳人
理事	松下 裕秀
理事	高橋 雅英
人文学研究科長	佐久間淳一
教育発達科学研究科長	植田 健男
法学研究科長	石井 三記
経済学研究科長	野口 晃弘
情報学研究科長	村瀬 洋
理学研究科長	杉山 直
医学系研究科長	門松 健治
工学研究科長	新美 智秀
生命農学研究科長	川北 一人

国際開発研究科長	東村 岳史
多元数理科学研究科長	納谷 信
環境学研究科長	岡本 耕平
創薬科学研究科長	饗場 浩文
環境医学研究所長	山中 宏二
未来材料・システム研究所長	興戸 正純
宇宙地球環境研究所	草野 完也
附属図書館長	森 仁志
医学部附属病院長	石黒 直樹
総合保健体育科学センター長	山本 裕二
人文学研究科	長畑 明利
教育発達科学研究科	伊藤 彰浩
法学研究科	下山 憲治

経済学研究科	福澤 直樹
情報学研究科	北 栄輔
理学研究科	阿波賀邦夫
医学系研究科	藤本 豊士
工学研究科	梅原 徳次
生命農学研究科	下村 吉治
国際開発研究科	梅村 哲夫
多元数理科学研究科	岡田 聡一
環境学研究科	西澤 泰彦
創薬科学研究科	山本 芳彦
教育研究共同施設連合選出	戸田山和久
教育研究共同施設連合選出	野尻 伸一

## 総長補佐

総長特命事項担当	神山 知久
総長特命事項担当	西山 崇志
総長特命事項担当	松本 英登
国際化推進担当	土井 康裕
アジア戦略担当	中野 秀雄
国際機構担当	中東 正文
G30担当	サイモン ウォリス
教育担当、評価担当	戸田山和久
情報国際ネットワーク担当	武田 一哉

施設整備担当	奥宮 正哉
財務担当	根本 二郎
産学官連携担当	水野 正明
産学官連携担当	廣明 秀一
産学官連携担当	石川 隆司
社会連携・社会貢献担当	宇澤 達
研究・教育支援担当	梅原 徳次
研究推進担当	一村 信吾
研究推進担当	大野 欽司

研究推進担当	田中健太郎
災害対策担当	鈴木 康弘
労働安全担当	村田 静昭
評価担当	横溝 大
評価担当	長谷川好規
入試担当	石井 秀宗
人権担当	福澤 直樹
人権担当	渡部美由紀
リスク管理担当	下山 憲治

## 部局長等

本部		
事務局	事務局長	磯谷 桂介
総務部	総務部長	木下 孝洋
	総務課長	市川 真康
	人事課長	原 盛将
	人事主幹	遠藤 典子
	職員課長	樋田 浩和
	広報渉外課長	廣川 光之
	渉外主幹	赤川 泰弘
企画部	企画部長	松本 英登
	企画課長	廣石 孝
財務部	財務部長	佐々木 強
	財務課長	藤田 尚弥
	財務調整主幹	岡部 衛
	財務戦略主幹	伊藤 誠
	経理・資産管理課長	村手 隆司
	契約課長	佐田 隆昭
教育推進部	教育推進部長	小野 幸嗣
	教育監	高下 一磨
	基盤運営課長	河合 泰和
	事業推進課長	上野山多恵
	国際主幹	篠原 量紗
	教育企画課長	浅野 国裕
	共通教育推進主幹	河口 正樹
	学生支援課長	大脇 申子男
	学生交流課長	内出 裕之
	入試課長	武藤 英幸
	国際入試主幹	小崎 光芳

研究協力部	研究協力部長	吉野 明
	産学官連携監	加藤 滋
	研究支援課長	吉田 雄介
施設管理部	社会連携課長	堂前 弘樹
	施設管理部長	中西 幸博
	施設企画課長	向井 和人
	施設整備課長	園田 秀久
	施設管理課長	白井 隆司
	環境安全支援課長	山本 直也
運営支援組織	学術研究・産学官連携推進本部長	財満 鎮明
	国際機構長	渡辺 芳人
	情報連携統括本部長	松下 裕秀
	情報推進部長	山崎 信広
	情報推進課長	古橋 悟志
	情報基盤課長	服部 昌祐
	環境安全衛生推進本部長	磯谷 桂介
	防災推進本部長	磯谷 桂介
	IR 本部長	松尾 清一
	キャンパスマネジメント本部長	木村 彰吾
	教育基盤連携本部長	松下 裕秀
	施設・環境計画推進室長	奥宮 正哉
	核燃料管理施設長	榎田 洋一
評価企画室長	前島 正義	
ハラスメント相談センター長	小池 晃彦	
社会連携推進室長	宇澤 達	
災害対策室長	飛田 潤	
男女共同参画室長	東村 博子	
法務室長	和田 肇	

運営支援組織	リスク管理室長	和田 肇	生命農学研究科・農学部	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	松田 洋一	
	総合企画室長	前島 正義		農学部・生命農学研究科事務長	松岡真一郎	
	PhD 登龍門推進室長	前島 正義		国際開発研究科	国際開発研究科長	東村 岳史
	動物実験支援センター長	高橋 雅英		多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	納谷 信
	大学文書資料室長	磯谷 桂介		環境学研究科	環境学研究科長	岡本 耕平
	国際共同教育研究プログラム推進室長	高橋 雅英			附属地震火山研究センター長	渡辺 俊樹
	障害者支援室長	木俣 元一			附属持続的共発展教育研究センター長	久野 覚
監査室	監査室長	和田 肇		環境学研究科事務長	伊藤 秀樹	
	監査室主幹	林 正康	創薬科学研究科	創薬科学研究科長	饗場 浩文	
人文学研究科・文学部	人文学研究科長・文学部長	佐久間淳一		創薬科学研究科・細胞生理学研究センター主幹	林 明美	
	附属「アジアの中の日本文化」研究センター長	藤木 秀朗	教養教育院	教養教育院長	戸田山和久	
	附属人類文化遺産テキスト学研究センター長	阿部 泰郎	アジアサテライトキャンパス学院	アジアサテライトキャンパス学院長	磯田 文雄	
教育発達科学研究科・教育学部	教育発達科学研究科長・教育学部長	植田 健男	高等研究院	高等研究院長	篠原 久典	
	附属中学校長	中嶋 哲彦	トランスフォーメティブ生命分子研究所	トランスフォーメティブ生命分子研究所長	伊丹健一郎	
	附属高等学校長	中嶋 哲彦	環境医学研究所	環境医学研究所長	山中 宏二	
法学研究科・法学部	法学研究科長・法学部長	石井 三記		附属次世代創薬研究センター長	澤田 誠	
	附属法情報研究センター長	増田 知子	未来材料・システム研究所長	未来材料・システム研究所長	興戸 正純	
経済学研究科・経済学部	経済学研究科長・経済学部長	野口 晃弘		附属未来エレクトロニクス集積研究センター長	天野 浩	
	附属国際経済政策研究センター長	山田 基成		附属高度計測技術実践センター長	八木 伸也	
文系事務部	事務部長	斉藤 肇	宇宙地球環境研究所	宇宙地球環境研究所長	草野 完也	
	総務課長	高田 義雅		附属国際連携研究センター長	塩川 和夫	
	経理課長	坂口 敏弘		附属統合データサイエンスセンター長	坪木 和久	
	教務課長	鎌澤かおり		附属飛翔体観測推進センター長	高橋 暢宏	
情報学研究科・情報学部	情報学研究科長・情報学部長	村瀬 洋	研究所事務部	事務部長	村井 澄夫	
	附属組込みシステム研究センター長	高田 広章		総務課長	塚崎 一彦	
	附属グローバルメディア研究センター長	中村 登志哉		経理課長	市岡 浩之	
	附属価値創造研究センター長	武田 浩一		附属図書館	附属図書館長	森 仁志
	情報学部・情報学研究科事務長	合田由美子			医学部分館長	濱嶋 信之
理学研究科・理学部	理学研究科長・理学部長	杉山 直		研究開発室長	森 仁志	
	附属臨海実験所長	澤田 均		附属図書館事務部長	木下 聡	
	附属南半球宇宙観測研究センター長	金田 英宏		情報管理課長	竹谷喜美江	
	附属構造生物学研究センター長	本間 道夫		情報サービス課長	高野 恵子	
	附属タウ・レプトン物理研究センター長	原田 正康		情報システム課長 (事務取扱)	木下 聡	
	附属ニューロサイエンス研究センター長	森 郁恵	学内共同教育研究施設等	アイソトープ総合センター長	竹中 千里	
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	齋藤 勝行		遺伝子実験施設長	木下 俊則	
	医学系研究科長・医学部長	門松 健治		物質科学国際研究センター長	山口 茂弘	
	附属医学教育研究支援センター長	大野 欽司		高等教育研究センター長	水谷 法美	
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 隆		農学国際教育協力研究センター長	山内 章	
医学系研究科・医学部	医学部附属病院長	石黒 直樹		博物館長	大路 樹生	
	医学部・医学系研究科事務部長	永家 清考		心の発達支援研究実践センター長	金井 篤子	
	事務部次長	安友 政男		法政国際教育協力研究センター長	小畑 郁	
	総務課長	安田 浩明		生物機能開発利用研究センター長	中園 幹生	
	人事労務課長	西尾 哲也		シンクロトロン光研究センター長	曾田 一雄	
	学務課長	今枝 明光		基礎理論研究センター長	野尻 伸一	
	経営企画課長	平松 利朗		現象解析研究センター長	飯嶋 徹	
	経理課長	近藤 正仁		減災連携研究センター長	福和 伸夫	
	施設管理主幹	加藤 千喜		細胞生理学研究センター長	廣明 秀一	
	医事課長	坪井 信治		脳とこころの研究センター長	長縄 慎二	
	大幸地区事務統括課長	棚瀬 隆夫		ナショナルコンポジットセンター長	佐宗 章弘	
	工学研究科・工学部	工学研究科長・工学部長	新美 智秀		予防早期医療創成センター長	門松 健治
		附属プラズマナノ工学研究センター長	大野 哲靖		学生相談総合センター長	松本真理子
		附属材料パルクキャストテクノロジー研究センター長	小橋 眞	共同利用・共同研究拠点	情報基盤センター長	森 健策
		附属計算科学連携教育研究センター長	岡崎 進	総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	山本 裕二
		附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター長	新井 史人	未来社会創造機構	未来社会創造機構長	財満 鎮明
		工学部・工学研究科事務部長	大矢 淳一		モビリティ領域長	市野 良一
総務課長		澤村 明都		社会イノベーションデザイン学センター長	齋藤 永宏	
経理課長		和田 裕司	アジア共創教育研究機構	アジア共創教育研究機構長	根本 二郎	
教務課長		宮崎 洋介	素粒子宇宙起源研究機構	素粒子宇宙起源研究機構長	益川 敏英	
生命農学研究科・農学部		生命農学研究科長・農学部長	川北 一人	全学技術センター	全学技術センター長	財満 鎮明
	附属フィールド科学教育研究センター長	戸丸 信弘				

## 第58回名大祭を開催

第58回名大祭を、6月8日(木)～11日(日)に東山キャンパスで行います。

今年のテーマは「興名盛大」です。

さまざまな企画を用意して、皆様のご来場をお待ちしております。

開催日程：6月8日(木)～11日(日)

会場：名古屋大学東山キャンパス

最寄駅：市営地下鉄名城線名古屋大学駅

(ご来場の際は公共交通機関をご利用ください)

### ●環境対策の取り組み

第58回名大祭では、環境保護への取り組みとしてごみの分別を徹底して行っています。また、模擬店での使用済みの油や割り箸、学内で出るペットボトルキャップを回収して、リサイクルを行っています。油は塗料に、割り箸は再生紙にリサイクルしています。またペットボトルキャップは回収しリサイクルされ、得た収益でワクチンが購入されています。ご協力をお願い致します。

### ●第58回名大祭における食品の取扱いについて

第58回名大祭におきましても、前回までの模擬店衛生管理体制を見直し、改善を行い、さらなる万全な模擬店運営システムの確立に名大祭実行委員会一同努めております。

皆様に安心して名大祭を楽しんでいただけるよう、千種保健所の指導の下、模擬店運営を行ってまいりますので、ご理解の程よろしくお願い致します。

### ●バリアフリーへの取り組み

第58回名大祭では、障がい者、子ども連れの方、妊婦、外国の方を含むすべての来場者の方々に名大祭を楽しんでもらえるように様々な取り組みを行っています。

多目的トイレや障害となる坂道などの場所を記したバリアフリーマップ、外国の方に役立つ英語マップを作成しています。また、各企画会場での優先席設置の促進、案内所で車いすの貸出しを行っています。

### お問い合わせ

名古屋大学学生会館第7集会室

名大祭実行委員会

TEL 052-789-5178

mail mail@meidaisai.com

URL http://meidaisai.com

Twitter @meidaisai\_NU



### ●講演会企画

「宇宙に届け！文学少女の夢」

毎年好評の講演会企画を開催致します。6月10日(土)には名古屋大学の卒業生であり、現在JAXAで宇宙に関わる仕事に携わる岩田直子氏を招き、ご自身の体験やお仕事についてお話していただきます。また質疑応答の時間もございます。奮ってご参加ください。

講師：宇宙航空研究開発機構（JAXA）岩田直子氏

日時：6月10日(土)

入場：12:45～13:30

講演：13:30～15:00

場所：IB電子情報館 中棟2階 IB大講義室

※現在、事前応募受付中です。詳細は名大祭実行委員会までお問い合わせください。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 臨床研究 不正を防げ：本学は生物統計など臨床研究に必要な知識を学ぶセミナーや、研究倫理について学ぶ講習会、eラーニングを実施	3.16 (木)	朝日 (朝刊)
2 交遊抄：タフな交渉者 ベトナム司法大臣レ・タイン・ロン氏本学博士課程修了者との交友 愛知県公立大学法人理事長鮎京正訓元本学理事	3.16 (木)	日経 (朝刊)
3 本学はタイムズ・ハイヤー・エデュケーションが発表したアジア大学ランキングで35位だった	3.16 (木) 3.17 (金)	中日 (夕刊) 読売 日経 (朝刊)
4 読売テクノフォーラム第23回ゴールド・メダル賞：伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所教授「迅速合成触媒の開発と機能性分子の創製」	3.17 (金)	読売
5 本学と日本貿易振興機構名古屋貿易情報センター、愛知県は、本学学術研究・産学官連携推進本部で「グローバルビジネス戦略立案ワークショップ」を開催し、土井康裕経済学研究科准教授が「当大学の留学生は増加しており、これまでとは異なるアイデアが生まれることを期待する」と語る	3.17 (金)	中部経済
6 展覧会：第23回博物館特別展球状コンクリーションの謎 - 化石永久保存のメカニズム 特別講演会「球状コンクリーションの謎」開催：4月1日 吉田英一博物館教授が講演など	3.17 (金) 3.31 (金)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
7 東濃地震科学研究所副首席主任研究員木股文昭氏元本学教授がブックレット「御嶽山 二度と犠牲をださない」を作成	3.17 (金) 3.27 (月)	中部経済 毎日 (夕刊)
8 就職活動、留学組なお寒風 今年も6月面接解禁「時間ない」本学など18大学、支援へ説明会	3.17 (金)	日経 (夕刊)
9 第76回中日農業賞：審査委員長の生源寺眞一生命農学研究科教授は「受賞者の半数が新規参入で農業を始めた、各地域の先駆者。後に続く人の優れたモデルになる」と語る	3.18 (土)	中日 (朝刊)
10 松尾総長は、本学が軍事技術に直結する研究に歯止めをかける独自の指針を策定することを明らかにした	3.19 (日) 3.24 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
11 新四段を祝う会開催：19日 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生は「地元のみなさんに応援してもらえて大変うれしい。期待に応えられるように頑張りたい」と語る	3.20 (月) 3.21 (火)	読売 中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
12 松林嘉克理学研究科教授らの研究グループは、植物の根の一部が栄養不足になった時に、葉から別の根に向けて栄養を取り込むよう指令するホルモンを発見	3.21 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
13 門松健治医学系研究科教授、内村健治医学系研究科特任准教授らのグループは、アルツハイマー病における特殊な構造糖鎖を発見	3.21 (火)	日経 (朝刊)
14 まちづくりとしての公共施設マネジメント 設計主義ではないまちづくりを 恒川和久工学研究科准教授	3.21 (火)	中部経済
15 「共謀罪」の趣旨を含む組織犯罪処罰法改正案をテーマにした市民講座があり、平川宗信本学名誉教授が講演	3.21 (火)	中日 (朝刊)
16 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生が2020年東京五輪を目指す有力選手として、合宿に参加	3.22 (水)	中日 (朝刊) 読売
17 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生が非公式戦で羽生善治王座と対戦	3.22 (水)	日経 (夕刊)
18 オープンレクチャー2017開催：20日 門脇誠二博物館講師らが講演	3.23 (木)	中日 (朝刊)
19 大同大学学長に就任する同大学教授神保睦子氏本学博士課程修了者が女子学生について「国の女性管理職の目標のように3割は増やしたい」と語る	3.23 (木)	読売
20 顔：ゴールド・メダル賞を受賞する 伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	3.23 (木)	読売
21 松尾拓哉遺伝子実験施設講師は緑藻の体内時計をリセットする赤や紫の光情報を伝える因子を発見	3.24 (金) 4. 7 (金)	中日 (朝刊) 科学新聞
22 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生がプロデビューから10連勝し、デビュー後最多記録に並んだ	3.24 (金)	中日 (朝刊) 他3社
23 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生が財務相の諮問機関である財政制度等審議会の会長に就任する見通しとなった	3.24 (金)	中日 (朝刊)
24 東海の経済力伸ばすには 松尾総長はグローバルな人材育成が必要とし「世界トップの人材を集めていきたい」と語る	3.25 (土)	読売
25 福和伸夫減災連携研究センター教授は愛知県が耐震改修の補助制度を創設することについて「ピロティの補強だけでも住民の命を守れる可能性が高まる」と語る	3.26 (日)	読売
26 稲盛財団2017年度助成対象者：上田奈津実理学研究科講師「空間パターンセパレーションにおけるセブチン細胞骨格の役割」	3.27 (月)	日刊工業
27 第14回詰将棋解答選手権チャンピオン戦：プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校2年生が優勝し三連覇となった	3.27 (月)	読売
28 平成28年度卒業式開催：27日 松尾総長は「社会が抱える困難で複雑な課題に果敢にチャレンジし、新しい時代を切り開くリーダーになってほしい」と語る	3.27 (月) 3.28 (火)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 読売
29 名城大学「光デバイス研究センター」新設を記念するシンポジウムが開かれ、赤崎 勇本学特別教授が講演で「レーザーダイオードは究極の光源。研究者や学生の皆さんが英知を結集し、作り上げてほしい」と語り、天野 浩未来材料・システム研究所教授は「センターが、日本がV字回復する拠点になってほしい」と語る	3.28 (火)	中日 (朝刊)


本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
30 環境学研究科附属地震火山研究センターと長野県は、御嶽山の麓で火山活動などを観測する研究施設を今年の6月をめどに開設する	3.28 (火) 4. 1 (土)	読売 朝日 (朝刊)
31 西村浩一環境学研究科教授は「表層雪崩とみられる雪崩を回避するには、スコップなどで雪を掘り、断面を観察したり、刺激を与えたりして、雪の状態を確認する予防策もある」と語る	3.28 (火)	読売
32 本学レゴ部の学生四人を講師にウェスティンナゴヤキャッスルで5～12歳の子供達がレゴブロックで「名古屋の街」を制作	3.28 (火)	中日 (朝刊)
33 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生が2025年国際博覧会の大阪開催を目指す「日本万国博覧会誘致委員会」の会長に就き「オールジャパンで大坂誘致を実現したい」と語る	3.28 (火)	毎日 (朝刊)
34 名古屋アイリスロータリークラブ「お笑いお花見会」開催：28日 医学部附属病院で行われた	3.29 (水)	中日 (朝刊)
35 アジア開発銀行 創設50年 キルギス国立銀行総裁トルクンベク・アブディギュロフ・サギンベコピッチ氏元本学留学生は「奨学金支給の通知が届いた日の喜びを、今でも鮮明に覚えている」と語る	3.29 (水)	日経 (夕刊)
36 本学レゴ部の安藤圭理さん同学生は4月1日にオープンする「レゴランド・ジャパン」の園内のレゴモデルについて「特殊なパーツを使わず、四角いブロックだけで作っているのに遠目にはレゴと分からない」と語る	3.29 (水)	中日 (夕刊)
37 草野完也宇宙地球環境研究所教授らのグループは、世界最大の太陽望遠鏡で太陽フレア爆発の前兆現象の詳細観測に成功	3.30 (木) 3.31 (金)	毎日 (朝刊) 他2社 日刊工業
38 ザ・科学遺産 医学編⑤：ムラージュ 息をのむリアルな教材 本学博物館	3.30 (木)	中日 (夕刊)
39 女性研究者に優しい環境へ 大同大学学長神保睦子氏本学博士課程修了者	3.31 (金)	毎日 (夕刊)
40 千種区内山三のバー「カルヴァドス」が31日に閉店 黒田光太郎本学名誉教授が「酒を飲みながら科学の話をしたら面白そう」と言い出し、「科学酒場」が4年続いた	3.31 (金)	中日 (夕刊)
41 本学がタイムズ・ハイヤー・エデュケーションの日本版ランキングで4位になった	3.31 (金)	読売 他4社
42 深井昌克学術研究・産学官連携推進本部主任リサーチ・アドミニストレーター 研究にも経営的視点が求められる時代。東海地区の経済発展のカギは、起業意欲にあふれるイノベーション人材の育成	3.31 (金)	朝日 (朝刊)
43 笑顔：卒業式で学生を代表して答辞 地震の揺れ研究継続 丹 裕也さん工学部4年生	3.31 (金)	中日 (朝刊)
44 東海キャンパル：学生編集の「東海キャンパル」創刊 取材して一言 広瀬美咲さん本学学生「生の意見やアドバイスは現実的で重たいが、的確で、きっと役に立つと思う」	3.31 (金)	毎日 (朝刊)
45 障害の壁 なくして学ぼう 障害者差別解消法の施行1年 模索する大学 本学は学生や教職員を対象に精神・発達障害に関するセミナーを開き、予想を上回る100人が参加した	4. 1 (土)	朝日 (朝刊)
46 医学部附属病院の小児科病棟で入院生活を送った板倉京平さんと孫思佳さん2名が、その体験をきっかけに医療の道を目指し、この春本学医学部に合格	4. 1 (土) 4. 4 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
47 巨大地震 予測に挑む 山岡耕春環境学研究科教授は海底観測について「地震の際に大きくずれ動く場所が分かったことで、次にどのような地震が起こるかを知ら手がかりになるかもしれない」と語る	4. 2 (日)	読売
48 病院実力：脳腫瘍 本村和也医学系研究科准教授は覚醒下手術に積極的に取り組んでいる	4. 2 (日)	読売
49 本学と信州大学などのチームは人工の遺伝子を組み込んでがん細胞を攻撃しやすくした免疫細胞を白血病患者に投与する新たな治療法を開発した	4. 3 (月)	日経 (朝刊)
50 文部科学省の「世界トップレベル研究拠点」と主なテーマ トランスフォーマティブ生命分子研究所 動植物科学と合成化学の連携	4. 3 (月)	日経 (朝刊)
51 大井貴史トランスフォーマティブ生命分子研究所教授は複雑なアミノ酸誘導体の新たな合成手法を開発	4. 4 (火)	中日 (朝刊)
52 2017名古屋市長選 私の意見⑥：女性の力 引き出して 束村副理事・生命農学研究科教授	4. 5 (水)	読売
53 熊本地震1年 災害を生きる④：鈴木康弘減災連携研究センター教授は東海地方を中心とする自治体の担当者が活断層対策について情報公開する「連携会議」も発足したことについて「活断層があるからこれをやっていたよかった、と次の地震が起きたときに言えるようにしたい」と語る	4. 5 (水)	朝日 (朝刊)
54 大学の寄付集め「稼ぐ」知恵絞る 寄付金額が多い大学：名古屋大学 45億	4. 5 (水)	日経 (朝刊)
55 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生がプロデビュー以来公式戦11連勝の新記録を達成 羽生三冠らが称賛	4. 5 (水)	読売 他4社
56 平成29年度入学式開催：5日 松尾総長は「勇気ある知識人に脱皮するためにチャレンジしてほしい」と祝辞を述べ、豊田章一郎全学同窓会会長は「大きな夢を持ち、新しいことにチャレンジしてほしい」とエールを送った	4. 5 (水) 4. 6 (木)	中日 (夕刊) 読売 中部経済
57 春の新聞週間6～12日：藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生 局面見極める目 養う	4. 6 (木) 4. 8 (土)	中日 (朝刊) 他4社 中部経済
58 情報学部看板除幕式開催：6日 松尾総長は「世界でトップレベルの学部をつくり上げてほしい」と式辞を述べた	4. 7 (金)	中日 (朝刊)
59 本学がタイムズ・ハイヤー・エデュケーションの日本版大学ランキングで4位になり、分野別ランキングでは教育リソースでは9位、教育成果では6位だった	4. 7 (金)	読売

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
60 愛知県立愛知総合工科高等学校 専攻科公設民営化開始式：6日 本学や名城大学など3大学1高専の教員17人などが技術者の卵を育てるために集結する	4.7 (金)	読売
61 時のおもりの司法権とは何だろうか？ 今や原子カムラの一員 池内 了本学名誉教授	4.8 (土)	中日 (朝刊)
62 慶應義塾大学学生吉野裕斗さん教育学部附属高等学校卒業生 世界一周 夢は国際支援 高校休学し29カ国 今は勉強	4.8 (土)	毎日 (夕刊)
63 科学の扉：ここが数学の最先端 森 重文本学特別教授は京都大学数理解析研究所について「個性がある人が多く、最先端の数学に出会える」と語る	4.9 (日)	朝日 (朝刊)
64 映画「3月のライオン」監修 先崎 学九段 観戦 作品と重なる 美しき舞台 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が同映画の主人公を思わせる逸材と取り上げられる	4.9 (日)	朝日 (朝刊)
65 NEWS 2 WEEKS：4日 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生がプロデビュー以来公式戦11連勝の新記録を達成	4.9 (日)	朝日 (朝刊)
66 毒と薬 表裏一体 珍しい動物の持つ毒の研究に取り組む北 将樹生命農学研究科教授は「植物や微生物などの毒の研究はやりつくされている」と語る	4.9 (日)	日経 (朝刊)
67 プロ棋士で四段の藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が非公式戦だが深浦康市九段を破った	4.10 (月)	朝日 (夕刊)
68 長尾能雅医学部附属病院教授は医療事故調査制度の開始から1年間で、届け出対象と思ったにもかかわらず、結果的に届け出られなかった死亡例の頻度が、中規模病院では大規模病院の5.1倍に上るとの調査結果について「専従医師の業務指針や教育プログラムの整備が必要だ」と語る	4.11 (火)	毎日 (夕刊)
69 渡邊智彦理学研究科教授と核融合科学研究所助教仲田資季氏らの研究グループはイオン質量による乱流抑制のメカニズムを解明	4.12 (水)	日刊工業
70 愛知学院大学モーニング・セミナー開催:11日 松尾総長が「尿は病気の情報源」と題して講演	4.12 (水)	中日 (朝刊)
71 高橋 隆医学系研究科教授は、愛知県がんセンター研究所の研究グループが大腸がんの転移を抑えるタンパク質を発見したことについて「医学部附属病院とがんセンターとの共同研究を重視していく」と語る	4.12 (水)	中日 (朝刊)
72 本学など9大学の学生の原子炉教育・訓練などに使われている近畿大学の研究用原子炉が12日、3年ぶりに再稼動する	4.12 (水)	日刊工業
73 オープンカレッジ：フェイク・ニュースを超えて 不確実な時代に大学は何ができるのか 名古屋経済大学教授中村真咲氏本学国際開発研究科博士後期課程満期退学	4.13 (木)	中部経済
74 木下俊則トランスフォーマティブ生命分子研究所教授らは、気孔開口の鍵因子を発見	4.13 (木)	日刊工業
75 「詰将棋解答選手権」1点差で決着 混戦 逆転 藤井四段V3 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生	4.13 (木)	朝日 (夕刊)
76 伊丹健一トランスフォーマティブ生命分子研究所教授、瀬川泰知理学研究科特任准教授、ポビー・ギョム同研究員らは、「カーボンナノベルト」の有機合成に世界で初めて成功	4.14 (金)	中日 (朝刊) 他3社
77 佐塚隆志生物機能開発利用研究センター准教授はバイオフィナリーに最適化したソルガム新品種「炎龍」の作出に成功	4.14 (金)	科学新聞
78 編集日誌：本学の研究チームが「夢の分子」の合成に成功し「ノーベル賞級の成果」と記者はみており、今後へ期待が高まる	4.14 (金)	中日 (朝刊)
79 活断層上の建築 規制を 鈴木康弘減災連携研究センター教授	4.14 (金)	読売
80 熊本地震 活断層保存を 鈴木康弘減災連携研究センター教授は「右ずれと左ずれが同じ敷地に現れるという学術的に極めて珍しい現象が起きた」と語る	4.14 (金)	毎日 (朝刊)
81 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生がプロデビュー以来公式戦12連勝し、記録を更新した	4.14 (金)	朝日 (朝刊) 他2社
82 歴代市長 どんなタイプ？実務型 アイデア型 元名古屋市長本山政雄氏元本学教授はアイデア型	4.15 (土)	中日 (夕刊)

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
<b>5月20日(土)、21日(日)</b> 場 所：理学部C館2階 物理会議室 (C207号室) 時 間：10:00～16:00 定 員：各20名 対 象：中学生以上、一般 参 加 費：500円 (実験教材費)	<b>先進科学塾@名大第15回講座「錯視・錯覚の物理」</b> 講 師：奥村弘二氏 (名古屋市立名東高等学校講師)、 杉本憲広氏 (元名古屋市立高等学校教員) 内 容：物理実験だけでなく「超能力!？」実験で錯覚の秘密を探る (両日とも同じプログラム)
[問い合わせ先] 未来材料・システム研究所 教授 中村光廣 052-789-3532	

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**5月24日(水)、11月22日(水)**

場 所：博物館野外観察園、  
博物館 2 階展示室  
時 間：13:00~15:00  
参 加 費：無料

### 博物館野外観察園見学会

案 内：西田佐知子（博物館准教授）、  
野崎ますみ（博物館研究員）  
内 容：季節の花をみながら自然を学び、電子顕微鏡でミクロの自然を  
見る（雨天決行）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**6月10日(土)**

場 所：野依記念学術交流館 2 階  
カンファレンスホール  
時 間：10:00~12:30  
定 員：200名  
対 象：一般、大学関係者、企業等で  
ハラスメント防止に携わる方  
参 加 費：無料

### ハラスメント相談センター・男女共同参画室

#### 「働く女性のパワハラ防止 —妊活ハラスメントからマタハラ・育ハラまで—

講 演 者：上野千鶴子氏（認定特定非営利活動法人ウィメンズアクション  
ネットワーク理事長）、  
小酒部さやか氏（株式会社 natural rights 代表取締役）、  
東村博子（生命農学研究科教授）



[問い合わせ先]

ハラスメント相談センター 052-789-5806

**6月20日(火)**

場 所：減災館 1 階減災ホール  
時 間：18:00~19:30  
定 員：100名  
対 象：一般  
参 加 費：無料

### 第131回防災アカデミー

講演題目：「歴史的木造建築の耐震診断と補強」  
講 演 者：藤田香織氏（東京大学准教授）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

**6月23日(金)**

場 所：日本経済新聞社名古屋支社 3 階  
日経栄カンファレンスルーム  
(名古屋市中区)  
時 間：18:30~20:00  
定 員：100名  
対 象：一般  
参 加 費：無料

### 国際経済政策研究センター・キタン会 第25回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「なぜ、企業不祥事は繰り返されるのか  
—組織行動論・変革論の見地から—」  
講 演 者：寺澤朝子氏（中部大学教授）



[問い合わせ先]

経済学研究科附属  
国際経済政策研究センター 052-789-4945

名大トピックス No.288 平成29年 5月15日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、受賞の掲載、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2699 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>) でもご覧いただけます。

表紙

桜の下で談笑する留学生ら  
(平成29年 4月 6日)



## 181 | ちょっと「ちょっと名大史」— 連載15周年 —

本誌『名大トピックス』に大学文書資料室が連載している、この「ちょっと名大史」が始まったのは、2002(平成14)年5月の第108号からです。それ以来、臨時号を除く毎月の定期号では1回も休むことなく連載を続け、ちょうど15周年を迎えました。

連載開始当時、『名大トピックス』は原則として表紙と裏表紙だけがカラーでしたが、裏表紙は単に最後のページというだけで、決まった様式はありませんでした。「ちょっと名大史」が始まったことにより、本誌の「終わりの顔」が定まったと言えるでしょう。その後、本誌が2005年4月の第143号から全ページカラーとなり、誌面もリニューアルされると、「ちょっと名大史」の体裁も一新されて現在に至ります。ただ、分かりやすい文章と写真・図によって名大史のトピックを紹介するコーナーであることは一貫して変わっていません。

連載当初は、名大の内外に残る記念物・建築物やそれにまつわる話題を紹介することをコンセプトにしていました。それが第30回あたりから、記念物等の有無にこだわらず、名大史に関する裏話や素朴な疑問、貴重な史料、時には名大史の根幹に及ぶ事項などもテーマとする、幅広い内容に変わっていききました。大学文書資料室にとっても、最新的话题や史料を折に触れて発信できる貴重な場になっています。

読み物としては、原則として1回で完結するようにしていますが、「名大をひきいた人びと」(①~⑱)や「学部の誕生と草創期」(①~⑨)など、複数回にわたるシリーズがあります。

大学文書資料室のホームページには、「ちょっと名大史」の全回のリストが掲載されており、そこから記事の画像も閲覧することができます。



1	2	3
4	5	

- 1 第1回「香葉園と愛知医科大学予科歌碑」。この回はとくに文章が短い、当初は回によって文章の字数に差があった。
- 2 第41回「NU マーカー 名大の学章一」(本誌第148号、2005年9月)。誌面のリニューアル後、文章の字数がほぼ一定になった。
- 3 第81回「坂田記念史料室 一世界の物理学史を語る一」(本誌第188号、2009年1月)。誌面のリニューアル後、写真・図に必要な応じて比較長いキャプションを付けるようになった。
- 4 第121回「近年の名大祭①—1990年代—」(本誌第228号、2012年5月)。名大祭が開催される6月前後の号は、その関係のテーマを取り上げることが多い。
- 5 第162回「東山キャンパスが「千種区不老町」になった日」(本誌第269号、2015年10月)。事務局から大学文書資料室へ移管されたばかりの法人文書から新発見された事実に基づいた内容。